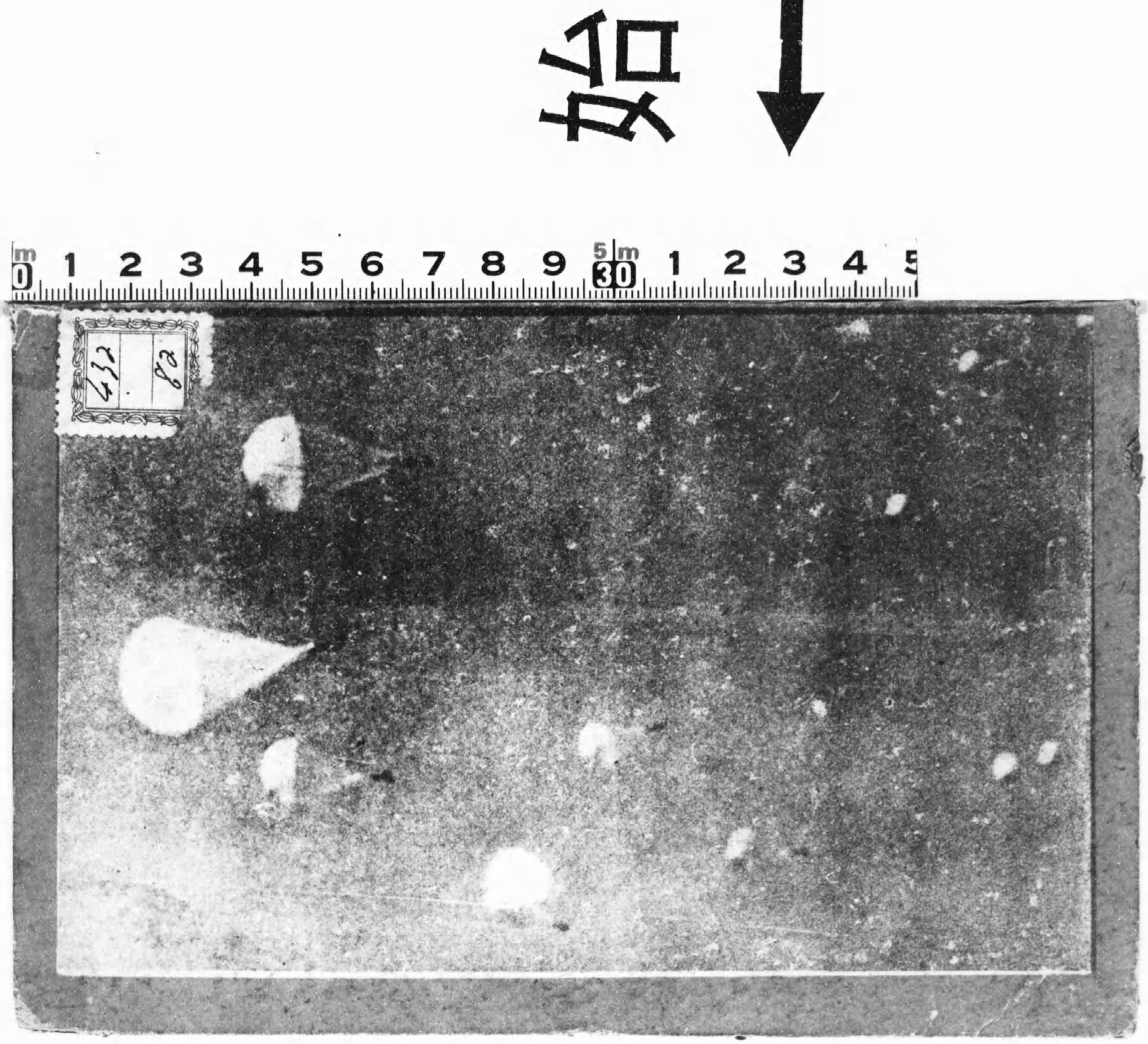
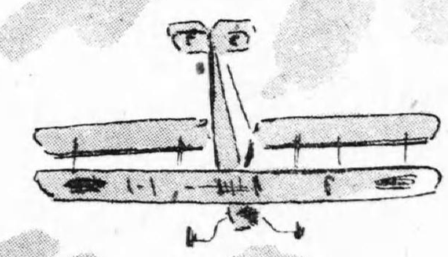

北
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5
432
82

特220
659

大空に生きる



伊藤松雄著

文松堂刊

昭和十九年
帝國圖書館

目次

血盟の友……一
光を失ひし父
呪はしき新入生
歩調を共に
故意か偶然か
あゝ血盟の友なれば
招く山彦……二九
開扉符號
弟の手紙

夢見る山
事件起る
支配人室
ふるさと
山の牧場
磯の如く
招く山彦
夜霧の村

峠の唄……五七
悲しき思ひ出
涙で濡れたハーモニカ

故郷よさらば
流浪の旅
恐ろしき一夜
爽やかな朝
幌馬車の唄

荒汐の母……八一
女なれども
餌に喰ひつくな
悲しき思ひ出
呪はしき煙突
父は生きてる

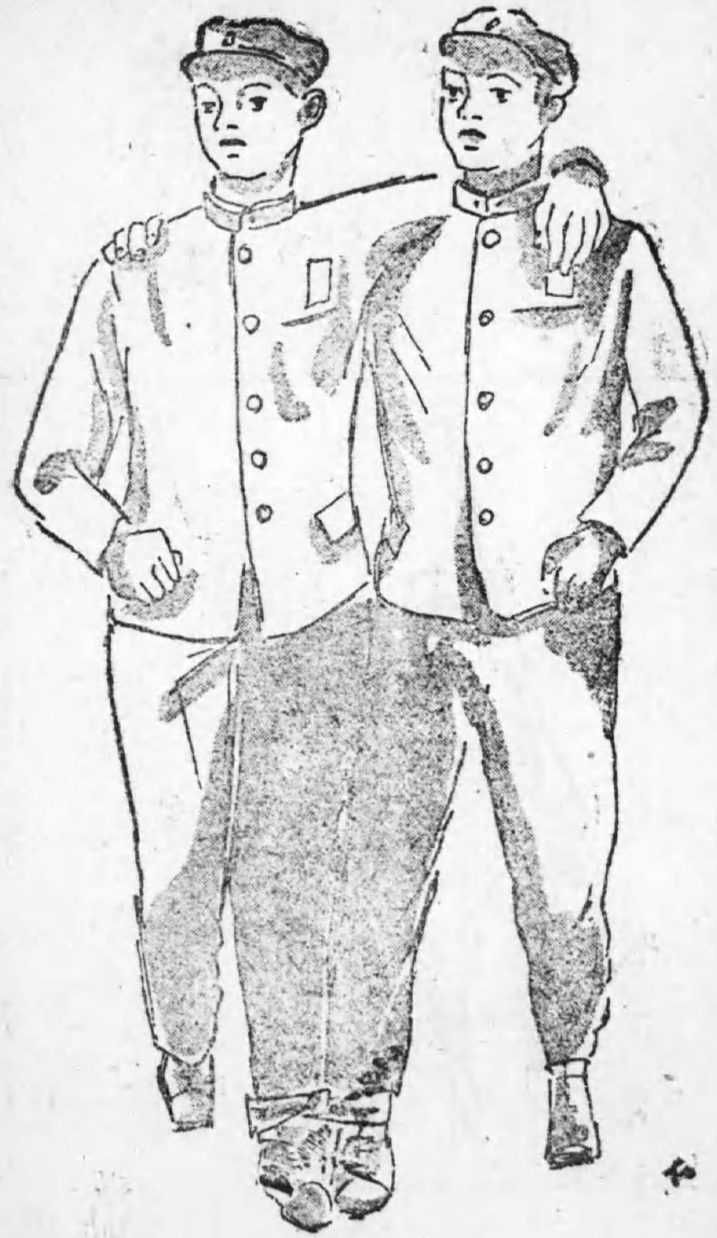
いか釣り夜船
漂着したものは？
重なる悲報
空を飛ぶ言葉
誰も泣かない
大空に生きる……一〇四
丘上の墓
賣られて行く馬
命をあづかる美代
悲しき遺書
純情の勝利……一二九

師の心づかひ
育ての親の爲に
アメリカからの迎へ
わかれ道
噫！ その日は來た
笠井投手最後の日
大陸の奇術師……一四一
掌に殘つたカード
罠かしら？
危機迫る白刃
怪人！ せむし男

あッ、獅子が！
炎の海
豪華なホテルの一室
左腕に赤アザを
口紅の一刷け
お父さん……
三人の怪漢
雪の絞殺城
今こそ嬉しい御奉公
あはれ漂泊の奇術師

満月郷の勇士……
アッ！　崇仁傑だッ
歸順匪賊は語る
どうせ生きては歸らん
白樺谷はどこだ？
雪崩にうたれて
女房杖は一本でよい
水路は開かれたり
大平原の英雄は誰だ？

血盟の友



光を失ひし父

「お父さん！　書きませうか？」

「さうだな――やつて貰はうか」

義男の父は、黒眼鏡をかけた、見えぬ眼に、手さぐりで、机をさぐりあてて坐つた。

「ゆつくり云つて下さいね」

「ああ――どうも、昂奮すると、つい、早口になつてしまふんだよ、は、は、は、は」

いかにも淋しさうな笑ひ聲をたてた。義男の父、十枝義一は、傷痍軍人だつた。

上海事變で、敵彈に、右のこめかみを射ぬかれ、それが原因で、兩眼とも、盲目

になつてしまつたのではどうやら、

だ。それから、滿四年餘りになる。いま杖にたよれば、獨り歩きも出來るし、心に餘裕が生じて來たのだらう。『上海事變の思ひ出』と題する著述に熱中してゐた。父の義一が語る儘を、義男は、書取の試驗のやうに、緊張して、鉛筆を握りしめ、洋型紙のノートへ、筆記してゆくのだつた。

「いいですよ、お父さん！」

「うん——何處迄だつたかな？」

いつでも、口述を始めるとなると、父の顏は、いかにも嬉しさうに、生々と輝

いてくる。

「ええと——」

義男は、昨日筆記した頁の、おしまひを讀んだ。

『（銃身は火の樣に熱してゐた。俺達は鐵兜の顎紐を、ギュッと締め直した。やがて空は、僅に仄白んで來た）——此處までです』

「さうか、ふうむ——よし、さ、いいか、書いてお呉れ」

「ゆつくりとね」

「うむ……」

義一は、キッと嚙みしめた唇から、重々しく語り出した。

「（夜明けだ、氣をつけろ！　俺は低聲で、併し、力强く云つた）いいかね？（隣りにゐた、南一等兵は、ニッコリ笑つた。軍曹殿、死なば諸共です。うむ！　俺は、彼奴の手をかたく握りしめ、笑ひ返した）どうだ、これ位なら、樂に書ける

だらう？」

「ええ――」

「いいかい？　後を續けるよ（僅少な、味方の一部隊、前面塹壕内の敵は……）塹壕つて字は知つてゐたね？」

「いままで隨分澤山出てますよ！」

「あはははは、さうだつたね、塹壕のない戰爭はないからな！」

「それに僕はもう中學二年生だから、字は大丈夫ですよ」

「や、御免々々、たのむよ、後を！（前面塹壕内の敵は數千、敵との距離は、十米……）」

「十米ですつて？」

「ああ、嘘のやうだ。併し眞實だ。毆り合ひだつて出來さうなんだ。いざとなつたら、躍りこんでやれ――みんなその覺悟だつた。さ、いいかい？」

「ええ！」

義男は、胸をワク〳〵させ乍ら鉛筆を握りしめた。

「（敵との距離は十米、滿身これ緊張そのもの――）待つた、待つた、こりやア拙い文句だな、一寸待つてお呉れ、云ひ直さう、かうつと――よし、さ、書いてお呉れ、（敵との距離は十米、ぢつと息を凝した瞬間、中隊長の劍は、さッとふられた。突擊ッ！　俺達は、狂人のやうに躍りあがつた。炸裂する砲彈、濛々たる爆煙、鐵の破片だ！　礫ッころだ！　土埃りだ！　中隊長は、バッタリ仆れた。俺は、俺達は……）」

「待つて、待つてお父さん、そ、そんなに早くちや書けませんよ」

さう云ひ乍らも、義男は、せつせと書きつづけた。と、義一は、机のはしを、確りと、兩掌で握りしめ、息をはづませてゐたが、耐へきれないやうに語りはじめた。

「(俺は、俺達は、思はず驅けよつた、(中隊長殿、確りなさい！　俺と南とは、身をもつて庇つた。が、遲かつた。どうせ死ぬつもりではあつた。併し、こ、これぢやア、あんまり飽氣ないぞ！　畜生！　こ、こんな事で死ねるものか――數米先きで、土煙りがバッ！　バッ！　と揚つた。不發彈かそれとも爆音が耳に入らなかつたのか――とにかく周圍の兵は、バタ〳〵仆された。南はガックリ首を垂れた。確りしろッ！　さう叫んだ。途端に俺は、血をグワッと吐いた……)」

「お父さん！　お父さん！」

義男は筆記しきれなかつた。半ば泣聲で叫んだ。

「お父さん、待つて！」

併し義一は、夢中だつた。

「(死んだ、死んだ――みんな死んでしまつた。その中で、俺一人助かつたのだ。かうして生きてゐる。不思議だ、俺の身體は生きてゐる。死んだのは、眼だけだ。

死んだ眼には、光りが見られない……)ああ、義男！お前の、お前の顏も見られないのだ！」

義一の頰には、さめざめと涙が流れた。義男も、鉛筆を捨て、いつかしやくりあげてゐた。泣くまいと、思へば思ふ程胸苦しく、涙があふれ出てくるのだつた。

呪はしき新入生

春は朗か――城西中學へ通ふ櫻並木は花ざかりだ。義男の制服の襟章には、II の字が眞新しく、ピカ〳〵光つてゐる。

「十枝君！」

高木がよびかけた。

「僕等の組へ新入生があるらしいね」

「へえ！」

「しかも、君の隣りだぜ」

成程、義男の机と並んで、新しく一脚殖えてゐる。

「どんな奴かなあ！」

第一時間目は、二年A組主任、室田先生の國語だ。始業のベルが鳴り終ると、やがて先生は、見慣れない少年を伴つて教室へ入つて來た。背のずばぬけて大きい、肥つた、色白の頰を、桃色に染めて、兩手をもち扱ふやうに、モヂ〳〵させてゐた。

「ええ——今日からこの級へ、この中村太郎君が轉入學されました。これまで神戸中學に居られて、大變よく出來る優等生ですし、身體もこんなに立派なので、ベースボールの選手でもあつたさうです。諸君にとつてよいお友達になれるでせう。お互ひに、一日も早く、仲好く馴染んであげて下さい——ぢやア……」

室田先生は、一寸間をおいて、しかつめらしく

「起立！　禮！」

と、双方にお辭儀をさせた。

中村太郎が、義男の隣りの机へ着いてから、先生は、授業にかからうとして、ほんの少しの間、云はうか、云ふまいかと、ためらつてゐるやうだつたが、

「ええ——それから、特にこの中村君に就て云つときますが——中村君はもと上海の方で、生れると直き日本へ來られ、いまでは日本人として歸化されてゐます……」

義男はハッとした。上海と云ふ字は、眼で讀んでも、耳できいても、憎い、憎い仇敵の感じがされるのだつた。

「……ですから、中村君は勿論、御兩親も、いまでは立派な日本人、我々の同胞

です。單にお父さん達の服裝とか、お家の仕事とかから想像して、中華民國の人だ――そんな風に差別してはいけません。特に念の爲注意として申しておきます。……」

義男は、そんな新入生と机を並べなければならないことを不愉快に感じた。

（何も、僕の隣りへ座らせなくたつて――）

そつと中村の横顏を盗み見た。と、彼は大きな身體をしてゐる癖に、赧い顏を。して、恥しさうにうつむいてゐた。そして、廊下から、窓ガラス越しに、心配さうに教室内をのぞきこんでゐる人影があつた。

（あれが親父だな！）義男はさう思つた。肥つた支那服の男だつた。

「おい！」

高木が、義男の背仲をつつついた。

「見たかい？」

「うん！」

「ふん、ふん！」

おどけた高木は鼻を鳴らした。

「十枝！ 臭かないかい？ ニンニク臭いだらう？」

義男も、一寸鼻を鳴して見た。

「ふん！ ふん！」

歩調を共に

友の盟血

休み時間が來ると、いろんな意味で、新入生中村は人氣者になりかけた。

「君！ ボールは何が得意なんだい？」

二年A組の主將市川が訊いた。

「僕（キャプテン）やつてましなんや」
「んや――つてなア餘計だね！」
高木がからかひ面（ざら）で口をいれた。
「高木！　よせ！」
市川は睨みつけて、
「で、君打撃順は？」
「四番か五番だんな」、
「あはは、だんな――だとよ」
高木はしつこくからかつた。
「そいつア有望だ！　十枝君！　君といいバッテリーが出來るせ！」
「厭だよ！　僕は厭だ！」
義男は、ムッツリした顔で、ズバリと云つた。

「なんであの人怒りなはつたんやろ！」
中村はオド〳〵した。
「怒つてやしないよ――安心し給へ！　あいつは素晴しいPなんだせ」
市川は慰めるやうに云つた。
「だけど中村君、言葉をはやくなほさないと可笑しいせ」
「なほしたい、思ふてます。大阪の川口で育つたもんやさかい、あんせう東京（とつこ）辯つかえしめへん」
「あはは、まだやつてやアがらア、行燈（あんどん）がへどで〆縄（しめなは）がどうしたつて？」
「高木！　よせつたら！　君ア今日どうかしてるぞ！」
市川は、高木へつかみかけるやうに、怒鳴つた。
「だつて、市川、十枝（とえだ）の氣持だつて――」
「あ、さうか――成程なあ！」

「君ひとりでバッテリーにきめたつて、そんな事ア駄目だよ」
「駄目だつて――つまり何だらう、十枝が上海ぎらひだからつてんだらう」
「さうさ、歸化してゐやうがまた中村の知つたこつちやアなからうがさ」
「そんな下らない感情は僕が捨てさせる」
「ふ、ふ、市川らしいな」
途端に始業のベルが鳴つた。
次ぎの休み時間に、市川は教官畠山大尉に頼みこんだ。
「よし／＼、そりやア十枝にしたら、多少不愉快な感じもするだらうさ、併し、中村が歸化人であつたら、尙更反省しなければいかんね。事變と云ひ、戰爭と云ふも、個人と個人の爭ひではないんだ、まして爭ひ果てた後まで、そんな仇敵感を持つなんて、日本人の襟度はもつと大きく持たんければいかん。よし／＼、俺が體操の時間に、厭でも應でも十枝と中村とをくつつけてやる！」

畠山大尉は自信ありげに笑つた。
第四時間目、體操だ。畠山大尉は、二年A組を整列させといて、まづ服裝の點檢を行つた。
「やすめッ！」
そこで大尉は、いつになく、微笑み乍ら云つた。
「今日はこれから二人三脚をやらせる」
いつの間に用意させたのだらう、級長の市川が、紅白の木綿紐を持ち出した。
「二人三脚は、一致協力の精神と行動とに仍らなければ、勝利が得られん。勝敗は結果だ。併し鞏固なる國を形づくるには國民が、級を形づくるには級友が、協同一致、歩調を共にせんければならん。その修養の一として二人三脚を行ふ、よいか、ではその一組々々を教官が撰ぶこととする」
森田と柴島が、岡田と金春が、植木と内村が、石島と齋藤が……こんな風に九

組十八人の名前がよび出されてのち、

「十枝と中村！」

教官の聲は凛として響いた。

「あれッ！　ひでえことになつたもンだ」

高木は首をすくめた。市川は畠山大尉のやりかたを、

「ふーむ！」

と感じいつた。

「中村！」

「はい！」

「君は今日から新入生だね」

「はい！」

「君と組む十枝は運動選手で、確り者だから、よく歩調を合せて、よいか、それ

から十枝！」

「はい！」

「君を特に撰んだのは、この新入生の中村に、まづ城西中學生の意氣を吹込む、その使命を君に與へる、よいか、しつかりやれ！」

「はい！」

併し十枝には、教官の言葉がそのまま肯じられなかつた。

「厭だ、誰が何と云はうとも、こんな奴と脚を縛りあつて走るなんて、厭なこつた」

十枝、中村の組は散々だつた。歩調を合せる處か、十枝はまるで、意識的に、歩調を合せまい〳〵としてゐるらしかつた。二人は二度も三度も轉んだ。土埃りにまみれた制服、十枝も中村も手には掠り傷がいくつも出來た。うつすらと血がにぢんでゐた。

「困つた奴だな！」

畠山大尉はかう呟いて、嘆息した。

故意か偶然か

それからと云ふもの、日毎に、十枝と中村との睨みあひが激しくなつた。中村もその理由が判つてくると、敗けてはいなかつた。

「十枝君の考へ方は偏見やで、阿呆らしうてかなはん、理窟がてんで判らん人や。僕がていまは法律できめたる通り、立派な日本人やないか、ふふん！」

A組は、十枝の氣持に同情する者、中村の考へ方に同情する者、二手にはつきりと分れてしまつた。中村は、自分の體力を利用して、ピッチングの練習をさへ始めた。

「面白いやあらへんか」

高木はおどけた調子で無責任に喋舌り歩いた。

「級マッチをやらうやないか、十枝と中村とをPにしてさ」

中村の關西訛りをそのままに、みんなを笑はせるのだつた。

やがて、その日は來た。花は散つて、葉ざくらはみどり、初夏を想はす微風が、爽な土曜日。紅組のバッテリーは中村と津田、白組のバッテリーは十枝と市川。紅組の先攻でプレイボール！ 一番打者津田はバンドの失敗で一死、つづく二番が金春で、四球、しかも素疾い盗塁功を奏して二塁へ入つた。三番打者は岡田、十枝は二塁走者を牽制しつつ、チエンジ・オブ・ペース巧みに、二ストライク二ボール！ 市川のサインになか〳〵應じなかつたが、やつと肯くと、

「やつたぞッ！」

直球、眼にもとまらぬ疾さで、

「ストラック、アウト！」

いつの間にか、十枝びいきと中村びいき二手にわかれた連中が、紅白兩軍の應援に睨みあひの形だ。

二死（ツーダウン）、走者（ランナー）二塁（セカンド）。四番打者は、中村だ。轉入學以來、試合としてははじめての打者（バッター）ぶり。十枝はキッと睨みつけて、市川のサインを待つた。

何しろ身體が大きく、背が高い。市川は、はじめ吊り球の高いボールをサインした。

「うむ！」

大きく肯いた十枝は、直球を物凄く投げこんだ。途端に

「あッ！」

グダーッと打者に近く球が曲がると、素疾く中村は身をかはしたが、間に合はなかつた。グシャッと云ふ、異様な音！　バッタリと仆れた中村。その顔面から、

ドッとばかりに鮮血があふれ出た。

ハッとした十枝は、總身から力がいつぺんにぬけて、腕、脚もグンナリと、すくむやうな氣がした。

マスクとプロテクタアとを、はづした市川は、いきなり中村の上半身を抱きあげた。

「中村！　しつかり！」

いつか十枝も駆けつけて叫んだ。

「許してくれ、中村、しつかりして呉れ、中村！」

中村は唸つてゐた。左り頬（ほほ）から鼻へかけての死球。とりあへず濡れ手拭（てぬぐひ）や、タオルで、冷したり、押へたりしたが、出血は止らない。中村の顔は、みる〳〵蒼ざめてゆくのだつた。

「病院へつれてゆかう、病院へ！」

十枝は蒼白な顔をして、氣も狂ほしげに叫んだ。
「僕はわざつとしたんぢやアない。間違つたんだ。ゆるしてくれ！」
「莫迦！　十枝そんなこと云つてる場合ぢやアないぞ」
市川　昂奮して怒鳴つた。
「おい、みんな手を貸してくれ！」
十枝も市川も、いつもたちのよくない冗談ばかりとばしてゐる高木までが、ユニフォームを血まれにして、中村を抱きあげた。

あゝ血盟の友なれば

病院の夜は更けてゐた。
「十枝、氣分はどうだ？　大丈夫か？」

「何ともありません！」
義男は元氣だつた。が畠山大尉は心配さうだ。
「併し――とにかく横になつて、やすんで下さい。十五歳の少年が輸血するなんて、些し無理だつたんですからね」
院長の戸並先生が云つた。
「無理だなんて云はないで下さい。僕の血で間にあふんだつたら、今夜も明日も輸血して下さい。僕はすまない、中村にまつたくすまないと思つてゐるんです」
「おい、十枝、もうねろ、中村はすつかり心臓の調子もよくなつたし、スヤ〳〵ねてゐるんだぞ、お前がそんなに昂奮したら、眼がさめちやうぢやないか、さ、教官の命令だ、ねろつたら、ねろ！」
畠山大尉は、ひどく亂暴に叱りつけるのだつた。
それもこれも教官の情からだつた。

この日、グラウンドから戸並病院にかつぎこまれた中村は、どうしても鼻出血が止らなかつた。夕ぐれが迫る頃、脈搏も微弱になつて來た。

「輸血しませう。仕方ありません」

戸並院長は、病床につき添つてゐた畠山教官に囁いた。中村の血液はO型だ。誰よりもはやく、

「僕の血を取つて下さい！」

さう云つたのが十枝だつた。義男は涙をうかべて嘆願した。

「さあ——よほど健康な、成人でないと」

戸並院長は首をふつたが、偖いに義男もO型だつた。

異常な昂奮と心痛に疲れきつたあと——、しかも輸血した義男だ。その顔色は蒼ざめてゐた。が、中村の枕もとに、しがみつくやうにして、せつせと氷でひやしつづけた。

「十枝心配するな、中村はもう大丈夫だ。お互ひの不幸がいまに幸となるだらうよ。いいか、君は仇敵視してゐた中村へ、尊い血さへわけてやる氣になつた。二人三脚どころか、その精神が俺は有難い。教官が日頃口癖に云つてきかせてゐる、大東亞主義の根本精神がそれだ」

畠山大尉の眼には涙が湛へられてゐた。

×

やがて一週間の後——十枝と中村とには、『二人三脚』の異名が謳はれはじめた。城西中學を通じて、この二人に敵し得る一組は絶對になかつた。二人は血肉をわけた兄弟にもまさる友情と友情とで結びあつた。さうだ。まこと血をわけあふた二人ではないか!? 中村の體内には、日本人の血が流れてゐるのだ。雄々しい傷痍軍人を父に持つ、十枝義男の血が。

爾來城西中學にはこんな唄が流行りはじめた。

あゝ血盟の友なれば
腕をば組んでゆかうよ
胸にみなぎる希望の唄
みどりの風に吹かれつつ
意氣たからかに高らかに

これぞ血盟の友情を讃ふる唄。新緑の五月、五月晴れの空に潑剌と響くのだつた。

招く山彦

開扉符號

五味正夫は、昭和ビルにある、東邦スレート會社の給仕だつた。日頃、働き者の彼だのに、近頃はまるで元氣がない。何か心配ごとでもあるのだらう。

一寸でも暇があると、五階の窓から大都會の家並を眺めてゐる。むし暑い日で、いまに暴風でも來さうな空模樣だ。斷雲を洩れてくる夏の陽は、廣告氣球の半面や、デパートの屋上を、ぶきみに照してゐた。正夫は、遠く聖恩病院の圓屋根を見つけると、

（どうぞ、お母さんの病氣が快くなりますやう……）にと祈るのだつた。

「給仕！　お茶ッ！」

「はッ！」

唐木課長は、支配人室へ入つていつた。

正夫がお茶を運んでゆくと、部屋の隅には巨大な金庫が据へられてあつて、横溝支配人は、いま正に、その扉を開かうとしてゐる。取引のある惠比須銀行員と課長とは、大鞄の中から、紙幣の束を、山のやうに、机の上へ積みあげてゐた。

正夫は、思はず、ゴクリと、つばきをのみこんで、

（うーむ、何萬圓と云ふお金だらうなあ）

窓から射しこむ、白茶けた光線に、金庫の扉を開く數字盤がはつきりと見られた。

いつか正夫の眼は、把手を握る、横溝支配人の手に釘付けされてゐた。

3——4——6——7……

正夫は、口の中で呟いた。

（三、四、六、七……はは、ああすれば開くのか！）

支配人室を出ると、事務所内に備へてある用箋へ何の氣もなく、彼はいたづら書きをした。

「金庫を開けるには３４６７」

ピッと破つたその紙片をポケットへいれた。

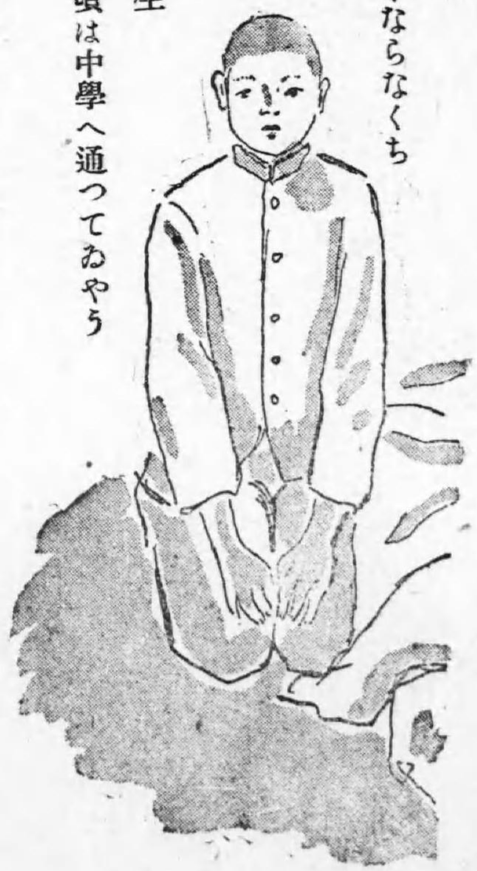
弟の手紙

會社が退けると、小使部屋でお茶漬を喰べさせて貰い、それから病院へ急くのだつた。

「夜業はやめかい？」

「ああお母さんが快くならなくちやア」

「まつたくお父つあんに死なれて不幸だね、お父つあんさへ生きてゐりやア、いま頃は中學へ通つてゐやうに……」



權爺さんはいかにも殘念さうに云つた。

正夫は、給仕生活も、夜學も、いまは苦にしてゐなかつた。唯だ母親妙子の病氣ばかりが心配だつた。

聖恩病院へ駆けつけるやうにして、母の病室へ通ると、かすかな泣聲が洩れて

かけ布團が細かに搖れてゐる。

「お母さん、どうしたの、泣くなんて!?」

「あ、正夫かい、御免よ、もう泣きはしないからね……疲れたらうね」

妙子は、涙を拭かうと、蒼白い指尖で、枕の下から、手巾をつまみ出した。

と、手紙がひよいと顔を出した。

「どこから來たの?」

「和夫からだよ」

「見てもいい?」

「そりやアかまはないけど」

なんだか、奥歯にモノがはさまつてるやうだ。

「モウ ジキ ナツヤスミデス リュックサック オミヤゲニモツテ キテクダサイ ウソツイチヤ イヤ カヅオ」

正夫は手紙をよみ乍ら、和夫との約束を思ひ出した。

(さうだ、そんな約束をしたつけ、嘘ついちやいや——か、困つたなあ)

と、母の妙子は、

「和夫は小さいからね、まだ何もわからないんだよ、だから、そんな暢氣なことを云つて……」

またしても母は涙ぐむで來た。

夢見る山

弟の和夫は、甲州と信州との、國境ひにあたる、祖父の家へあづけられてゐるのだつた。その村も、近頃は、繭がやすい爲に貧乏で、母の妙子や正夫までが厄介になるだけの餘裕はなかつた。

正夫は、弟の手紙を見るにつけても、八ケ岳の山脈や、カッコーの啼く白樺林が眼に浮んで來た。

「お母さん、朝風は丈夫でせうね」

「ああ、達者な馬だからね、きつと和夫の好い遊び友達だらうよ」

「お休みと賞與でも貰へば、僕も歸つて見たいんだが――」

「ほんとにね、どんなに祖父さんがよろこぶか――だけど母さんがこんな病氣ぢやアね」

「なんとかしてリュックサックは送つてやりませうよ」

「無理しないでね」

正夫は、母の病室に、その寢臺の下に、ゴロ寢をした。

みどりに燃えたつ高原の夏、朝風はたてがみを爽な大氣になびかせて、高らかにいなないてゐる。と、裸馬に小さい和夫はヒラリと乘つて、あかい頰つぺた

に玉の汗をかき乍ら、鞭をふるのだつた。

(いいな。高原の生活は、あんなに弱かつた和夫が、こんなに元氣を取戻した。お母さんも、病氣のあと、高原生活でもさせられたら……)

さう思つた途端に夢はさめた。外はひどい暴風雨だ。

と、今度は、支配人室で見た紙幣束の夢だ。それから金庫の姿――3467…

…

(あの紙幣が金庫に入つてゐるんだ。あの何百分の一か、いや何千分の一でもあつたら、お母さんの汽車賃になるだらう、そしてリュックサックも買へるだらう)

正夫にとつては、實に寢苦しい一夜だつた。

事件起る

朝になると、暴風雨は止んで、カラリと晴れてゐた。そのかはり、強い夏の陽がヂリ／＼と照してゐる。會社へ急ぐ途中、正夫はふと昨日のいたづら書きを思ひ出した。

「金庫を開けるには３４６７」

（あ、あんなことを紙片へ書いたが――）慌ててポケットをさがしたけれど、見當らない。

（おとしたかしら――もし會社の廊下へでもおとして、それを悪い奴に拾はれでもしたら）

さう思ふと、急に心配になりだした。

（昨夜はあんなひどい暴風雨だつたし……）

昭和ビルのエレヴエータアが五階で止ると、警官が廊下の隅々に立つてゐたし、和服の刑事らしい人が支配人室を出たり入つたりしてゐる。

「何かあつたんですか？」

「君は何んだ？」

「僕、東邦スレートの給仕ですが」

「ぢやア早く行け！　昨夜金庫破りがあつたんだ」

「えッ？」

正夫は、みる／＼うちに蒼白となつた。

彦山「は、は、は、は、なんだ、君は給仕ぢやないか、そんなに心配しなくともいいさ、まるで支配人みたいだな」

招く警官の一人はからかい顔で笑つた。

併し正夫は、泣き出さんばかりの氣持だつた。

（あの紙片を拾はれたんだ、きつとさうに違ひない――さうでなくてあの金庫が破れるもんか、開けられるもんか）

支配人室

事務所へ入ると、正夫の脚は一層ぶる〳〵ふるへた。

（僕の所爲だ――申しわけがない）

（だが、若し、默つてゐたら――）

かう思つた。途端に、弟和夫の書いた手紙が閃いた。

（ウソ　ツイチヤ　イヤ）

（さうだ、嘘をついてはいけない、よしいさぎよく支配人へ名のつて出やう）彼

は、支配人室へ入つてゆくと、何もかも包みかくさずに云つた。

「ほんの僕のいたづら書きからこんな事をひき起して申譯ありません。あの紙片をおつことしたばつかりに、惡い奴に拾はれたのです、どうぞおゆるし下さい」

正夫は、涙をさめざめと流した。

「いや、犯人は、藥品をつかつて、あの金庫を開けたのだよ」

「え？　では――」

「しかも君の書いたと云ふその紙片は、僕が拾つたんだ。社員の中にこんなものを持つてゐる人間がゐるかと思つたら、びつくりしたよ、もう社員諸君を信用してはゐられんね……」

「あ、支配人さん……」

「待ち給へ、そこで僕は、昨日この金庫へいれた三萬圓ばかりの紙幣束をこつそり自宅へ持ち歸つたのだよ。處が偶然にも昨夜金庫破りが襲擊したと云ふ譯さ、

何が幸福になるか知れやせん――人間誰しも過失はある。併し、悔い改むる事に勇敢であつてこそ眞の男子だ。僕は君の告白をえらいと思ふ。君こそ今後信頼し得る少年だ。君の過失、過失の功名と云ふことになるのだ。些し餘分に賞與をあげるし、一週間休暇をあげやう、病氣のお母さんを田舍へでもつれてつて靜養させたらどうだね」

正夫は、膝がガクガクとぬけるほどうれしかつた。床へペタンと座つたまま、

「有難う御座います、勘辨して頂いて有難う御座います」

ふるさと

「お母さん、もう直ぐですよ」

「大丈夫、安心おし、新宿の歩廊を歩いた時には、こんなで汽車へ乘れるか

と思ふほど苦しかつたけど……」

「さ、この次ぎが富士見ですよ」

列車は、八ヶ岳の山裾を、あえぐやうにして登りつめてゐた。

驛の構内へ入つてゆくと、和夫が、紫外線で燒けたたくましいやうな顏色をして、白髯のお祖父さんと二人、兩手をあげて叫んだ。

「お母さん！　正夫兄さん……」

「ほう、和夫が、祖父さんも――」

母の妙子は案外しつかりした歩調で歩廊へおりた。

「兄さん、リュックサックは」

「は、は、は、お土産は家へ戻つてからぢや！」

祖父さんは和夫の手をひいて改札口の方へゆきかけた。

「いやだ、いやだ、僕背負つてゆくんだ、持つて來たの？　嘘吐いちやいやだ

よ」

正夫は、うむと肯づいた。

「大丈夫、お母さんも兄さんも嘔吐きやしないよ」

抱へてゐた紙包みを破くと、小さなリュックサックを和夫の背へにならはせてやつた。

「やあ、コップもついてるね、こりやア大人みたいだ……」

和夫はおどりあがつてよろこんだ。

「これを負つて朝風へ乘るといいね」

「あ、兄さん、朝風病氣なんだよ」

「へえ！」

「それでね、山の牧場へあづけちまつたんだよ！」

「さうか、殘念だなあ！」

正夫は、うつすら記憶してゐる、山の牧場を心に描きながら、八ヶ岳の中腹を見あげた。

山の牧場

母の妙子は、めき〳〵元氣づいていつた。

正夫は弟の和夫といつしよに、背戸の銀杏の樹へ、猿のやうによじのぼつたり四粁ばかり離れた溫泉プールへ出かけて泳いだり、谷川で釣をしたり、眞黑な陽やけを自慢しあつた。

「あと、幾日ねると東京へ歸るの？」

「うむ、お母さんはこつちだが、兄さんはもうあと二つねたら歸るよ、會社があるからね」

「おや〳〵」
「和夫、明日あたり、山の牧場へいつて見るか？」
「うむ！」
「歩けるかい？」
「大丈夫だよ、リュックサックへおべんといれてね」
「は、は、は、は」
兄弟は、枕をならべて眠つた。
翌る朝――二人は、山往道を登つていつた。

〽山にのぼろかヨ　ホホホイ
のぼろよ山に　ヤレコノサ
みそら十里は、岳の町
コノヤレコノ八ケ岳

『八ケ岳ぶし』を唄ひ乍ら登るのだ。
ホホイで、息をつくと、山登りが樂だ。
白樺の地帶を過ぎると、やがてお花畠だ。山脈四十粁にそびへたつ八つの峰々、その中腹に遠く山の牧場があるのだ。群をなして、自由に驅け廻る馬、そのいなきはいかにも朗らかだ。
「さ、あと二キロだよ！　歩けるかい？」
「ふふん！」
尋常一年生の癖に、山で育つたせいか、和夫はなか〳〵脚が達者だ。
「兄さん、近道しやうか？」
「そんなものあるのかい？」
「うむ、この谷川に添つて、登るんだよ、すこし大變だけど一キロもないせ」
「さうか」

「それに、ほら、馬や牛の聲がするだらう、みんな、此の上の平まで遊びに來るんだよ、もしかすると朝風に逢へるせ」

「おやア、さうしよう！」

二人は、登山路を外れて、灌木の茂みをわけて這ひ登りはじめた。

礫の如く

「大丈夫かい？　和夫！」

「――」

弟の和夫は、息をきらせてゐた。そればかりではない、はじめのうちこそ、山の獵師でも歩いたらしい徑がどうやらあつたものゝいまはただもう、岩石のつみ重りと、高山帶の名もしらぬ草が、這ふやうにしげつてゐるばかりなのである。

「どうしやう、和夫！」

「――」

弟の顏は蒼ざめてゐた。

「とにかくリユックサックをおろせよ、何か飲むか、喰べるかしやう」

正夫はリユックサックから握り飯を出したり、水筒の水をわけあつたりした。

和夫も些しは元氣づいて來た。

「あ、あんな處に鈴蘭が咲いてらあ！」

和夫がぐつと手を伸した瞬間であつた。

ズルッとすべつた足が、リュックサックを蹴とばしてしまつた。

「あ、リュックサックが！」

ズル〳〵ズルッと岩石の傾斜面を滑り出すと、勢ひがついたものか、そのまま二十米も下の峡へ落ちていつた。

「あ――ッ！」

和夫は、泣聲とも、喚き聲ともつかぬ叫びをあげると、それを追つかけるやうにおちかけた。

「危いッ……和夫」

手をのばしたが、遅かつた。否、正夫までが、和夫の重みにひかされて、兄弟は、手をつなぎあつたまま、轉落する礫の如く、二十米ばかり一氣にズルズルッと、峡へおちていつたのである。

招く山彦

幾時間たつたらう、正夫は、ふと眼をあけた。と、霧がまいてゐる。和夫はシク〳〵泣いてゐる。

「どうした和夫！」

「兄さん、眠つちやうんだもの！」

「眠つたんぢやないよ、氣を失つたんだよ！」

身體の節々がズキ〳〵痛む。が、たいした怪我はしてゐない。弟の身體は何ともない。

「リュックサックあつたよ！」

和夫はしつかりと抱へてゐる。

「のんきだなあ、もう何時かしら、何とかして谷川べりへおりるか、もとの山街道へ出ないと、歸れないよ」

「牧場は？」

「それどこちやないよ」

「だつて、すぐ上らしいんだよ、さつきから、どうも朝風らしい馬があつちこつち驅けてるんだよ、呼んで見たら鳴いたよ」

「よんで見るか！」

正夫はやれ〳〵と思つた。萬一朝風が呼べたら馬は道を知つてゐるだらう。

「朝風ェ――朝風ェ――」

兄弟は、聲を揃へてよんだ。ふたりの聲は、山彦となつて反響した。

「朝風ェ――朝風ェ――」

和夫の云つた言葉は、正しかつた。

「ひひいん！　ひひいん！」

確に、頭上にあたる地點から、馬のいなきだ。

「朝風ェ――朝風ェ――」

「ひひいん！　ひひいん！」

矢庭に草木をふみにぢるやうな物音がしたと思ふと、大小さまざまな礫がザラザラとおちて來た。

「和夫あぶない！　こつちへおより」

「あ、朝風だ、朝風だ、朝風がおりてくる！」

人間でさへも登りにくい急傾斜な山腹を、朝風はおりてくる、たてがみをふり亂し乍ら、泡をふいて、四股をふんばつて……。

夜霧の村

兄弟は、疲れきつた身體を、裸馬の朝風にのせてゐた、朝風は病みあがりとも見えぬ元氣で山街道を下つていつた。遠く夜霧に包まれた村の灯は、ぽつとにぢんでゐる。

「オーイ！　オーイ！」

ほたるの飛び交ふやうに、提灯のあかりがあちこつちでふられてゐた。

「みんな心配してるんだよ、でもよかつたね！」

正夫は弟の身體を抱きしめて云つた。

「ああ、お母さん泣いてるよ！」

「すまなかつたなあ！　お前がリュツタサツタを惜しがるからだよ」

「だけど、そのおかげで、兄さん、朝風にも逢へたし、朝風に乘れたんだよ」

「ふ、ふ、ふ、ふ……」

兄弟ははじめて笑つた。

「あ、歸つて來まじたよ、祖父さん……」

すつかり元氣になつた母の妙子は提灯をふつて叫んだ。

「おお！　朝風に乘つて來たのか！」

「いや、谷へおつこちたんですよ、處が朝風をよんだらね、こいつが驅けおりて來て僕達を救つてくれたんです」

「よかつた、よかつた！」

祖父さんは、白い髯をユサ〳〵させ乍らカラ〳〵と笑つた。併しその皺んだ眼には涙がキラリと光つた。夜露ではない。

二人のおちた峽は、山彦谷と云つて、人間の耳では、救ひを求める聲をききつ

けても、見當のつきかねる場處だつた。

正夫は朝風に、好きなニンジンを喰べさせ乍ら呟いた。

「この夏はいろんな經驗をしたなあ！」

彼は十五歳である。

峠の唄

悲しき思ひ出

こぶしの實が赤くなつて來た。

淺黄の空を渡つてくる、むく鳥の群が、その實を見つけると、騷々しく集つてくる。

「次郎！　吹矢だ！」

「うん！」

「ぢつとしてゐるんだよ、いいかい」

太郎は叢の中を夢中で腹這つていつた。ガサ〳〵ガサ〳〵と、草の葉が鳴る。

初秋の風は、こぶしの赤い實にも吹いてゐるのだ。

太郎は、吹矢の筒を唇へあてると、ねらひを定めてフッ！　と吹いた。サッと、

とんでゆく吹矢、カチン！　惜しや、こぶしの下枝に當つた。バーッと飛びたつむく鳥の羽音――だが、ぢきに鳥の群は梢や下枝へと戻つてくる。

太郎はもう、長い間、叢の中に身を忍ばせたまま、あつちへ、こつちへ這ひ廻つたので、どつちの方角に次郎を殘して來たのか、見當がつかなかつた。

再び太郎は、吹矢の筒を唇へあてた。一番下枝のむく鳥に、ねらひをつけたのだ。精一杯、息を吸ひこんで、顏を赧くいきませ乍ら吹いた。

「フッ！」

とたんに、思ひがけない方向で次郎がキャッと云ふ悲鳴をあげた。むく鳥は、一整に舞ひたつた。

「次郎、どうした」

太郎が叢を這ひ出すと、

「あッ！　次郎！」

五六メートル前方の土堤下に、次郎は金切聲で泣き叫んでゐた。しかも、その顔は、いちめんの血汐だ。

小さな兩掌で眼を押へてゐる。

「次郎！」

太郎は、吹矢の筒をすてると、弟のところへ轉げるやうに飛んでいつた。

「御免よ、次郎！」

さう云ひかけて、太郎は、思はず、

「あッ！」

と顔をそむけた。むく鳥をねらつた吹矢が、弟次郎の兩眼を斜めに、つきささつてゐるのではないか!?

弟の顔は、血だらけのまま、蒼ざめてゆく、いまはその泣聲さへも細つて行く……。

涙で濡れたハーモニカ

次郎は盲目になつたのだ。兄の太郎は、自分の過ちから、弟を不具にしたその後悔に、小さな胸を痛めずにはゐなかつた。わざとしたのではない——が、夜が明けて、朝が來て、みんなが眠りから眼をさます時、弟次郎だけには、夜も晝もないのだ。

「御免よ、次郎、ね御免よ……」

いつもかう詫びつづけてゐた。二年、三年、五年の月日は流れた。太郎は町の中學へ通ふこともあきらめて、小學校を中途で退めた弟の遊び對手をつとめてゐた。

「雜誌をよんでやらうか？」

「うん！」
「鎮守様の森へつれてつてやらうか」
「うん！」
手引きをして、野や森をつれ廻つた。
「ほら、次郎、この匂ひかいで御らん！」
「ああ！　花だね？」
「きれいだよ！」
「どんな色だい？」
「赤い――」
「赤いつて、どんな色だつたかなあ！」
太郎はまたもあやまるのだつた。
「御免よ、次郎、兄さんが悪かつた」

次郎は唄ふことが好きだつた。太郎は、村のお醫者さんの山邊先生から蓄音器を借りて來ては、新しいレコードをきかせた。お寺の得度和尚さんは兄弟にハーモニカを買つて呉れた。

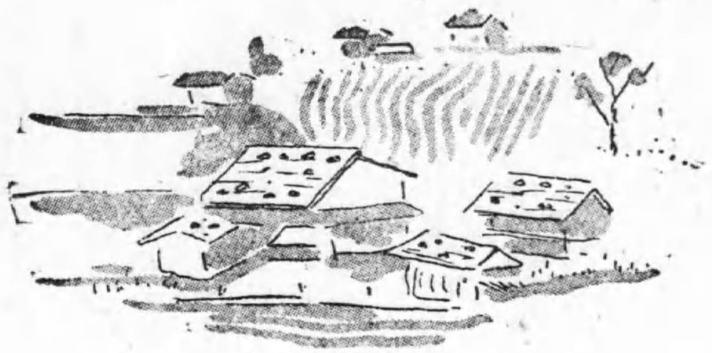
北は白馬よ　ホホホイ
南は穂高　ヤレコノサ
どちら立山思案に暮れる
キャムプ　キャムプ張つて
ファイヤ燃やせ
さあさ吹け〳〵ハーモニカ

唄つてさへゐれば、次郎は樂しさうだつた。

（可哀さうな弟……）

唄の幹

太郎は、眼に涙を滲へて、伴奏のハーモニカを吹くのだつた。



故郷よさらば

兄弟の不幸は、これだけでなかつた。頼りに思ふ父親の源十は、急病で死んでいつた。長泉寺の墓地には、はやく死んだ母親と並んで、父の墓標が建てられた。

「次郎や、さわつて御らん、これがお父さんのお墓だよ、こつちがお母さんのさ――」

「兄さん、これから僕たちはどうするの？」

「うん――」

太郎は、ぢつと涙をこらへて云つた。

「二人して東京へゆかうよ、ね、叔父さんがゐるから

――僕たちの家は、借金の爲に、取られちまふんだ。でも家なんか何だ。僕たち二人がいつも仲よくしてゐりや、それにこした幸福はないんだ」

「ああ！　だけど、東京へどうしてゆける？」

「歩いてゆくさ、お前が唄つて、僕がハーモニカを吹いて――さうすりやいくら

かでもお金が貰へるだらうよ。でもこれは乞食ぢやないよ。堂々と唄を唱つて金をとるんだもの」

兄弟は、高臺にある長泉寺の墓地から、なつかしの村を、見下してゐた。

（故郷よ、さらば……）さう叫びたい氣持で——

「兄さん、僕も一眼、村が見たいなあ……」

「御免よ、次郎、ゆるしてお呉れ！　ね！」

この時彼等の住みなれた家や、道具類は競賣にかけられてゐたのだ。

流浪の旅

湖のある上諏訪の町。そこをふり出しに、兄弟は、甲州街道を東へ、東へと旅した。時は新緑の頃、晴れた日には、土埃りのたつ街道を歩み村の四辻に佇つて次郎は唄つた。太郎の吹く伴奏のハーモニカは、ある時は朗らかに、またある時にはうら淋しく響いた。僅かばかりの銅貨が恵まれ、またある村では、握り飯にありついた。

雨の日には、汚い木賃宿を出て、町の蓄音器屋の店先で、新しいレコードの唄を、ききおぼえるのだつた。

今日も甲州街道、谷村の町はづれ、未だに乘合馬車しか通はない。とある茶店の軒下で、次郎は唄つてゐた。曇つて、いまにも降り出しさうな空模樣だつたが盲目の次郎は、銅貨の投げられる音をきくと。お辭儀をしては、唄ひつづけるのだつた。

唄の幹

「兄さん、俺、腹が減つた」

「うん、俺も減つた——だが次郎雨らしいんだよ」

「雨？　降つてやしないぢやないか」

「いや降つて來さうなんだ。それに、今日は貰ひも少ないし、今夜宿へ泊れない と困るからな、我慢おし、ね！」

「だつて、俺、腹が減つちやつて唄へないんだよ——」

太郎は、（困つたことを云ひ出したな）と思つた。苦しい旅がつゞいたためか、この頃の次郎は、妙に我儘が募つてゐた。

「いくらかたまつたらう」

「うん、少しぐらゐは」

が、銅貨や白銅（はくどう）をとりませて、五十錢にも足らぬ金では、いま二人が食事をしてしまふと、今夜の宿賃に足りない。

「腹が減つたよう」

「待つといで！ 餅でも買つてくるからね」

太郎は茶店へ入つていつた。

「おい！ お前、なか〳〵唄が巧めえぢやねえか？」

「へえ！」

次郎は見えぬ眼をふりあげて、答へた。そこには、土方風（どかたふう）の男が、ニヤ〳〵してゐる。

「氣の毒だから、おいらいま、お前のつれの子に五圓紙幣やつといたせ」

「へつ？ お札を？」

「ああ、しかも五圓だ！ お前盲目だからつて、ごまかされちやいけねえせ、お前が氣の毒だから、おいらうんと氣張つたものよ、あは、は、は、は、あばよ！」

（うーむ、五圓、お札だ！）

次郎は、唸つた（そ、それだのに、兄さんは、腹が減つたと云つても我慢しろと云つた。兄さんだけが何か甘いもの喰べてるのかもしれない——五圓もありやア、

汽車に乗つて東京へゆけるのになあ！）

「さ、次郎、お喰り、兄さんは我慢するからね、ほんの五錢だけ餅を買つて來たんだよ！　さ！」

「いやだ、俺ア餅なんか、いやだ、喰はん！」

可哀相に、次郎は、土方風の男の冗談を、ほんたうだと思つたのだ。

「どうしたんだ？　え？　次郎」

「嘘つつき、俺が眼が見えないからつて、そんな嘘ついたつて駄目だ！」

「な、なにを云ふんだ、え？　次郎、お前何か感違ひしてるんだね！」

太郎は、悲しそうな顔をして、餅を次郎にわたした。

「さ、お喰り、温いよ」

「いらねえ、そ、そんな餅！」

次郎は、亂暴にも、餅をつかむと、往來へパット投げつけた。

「あゝ次郎！」

雨がふり出して來た。

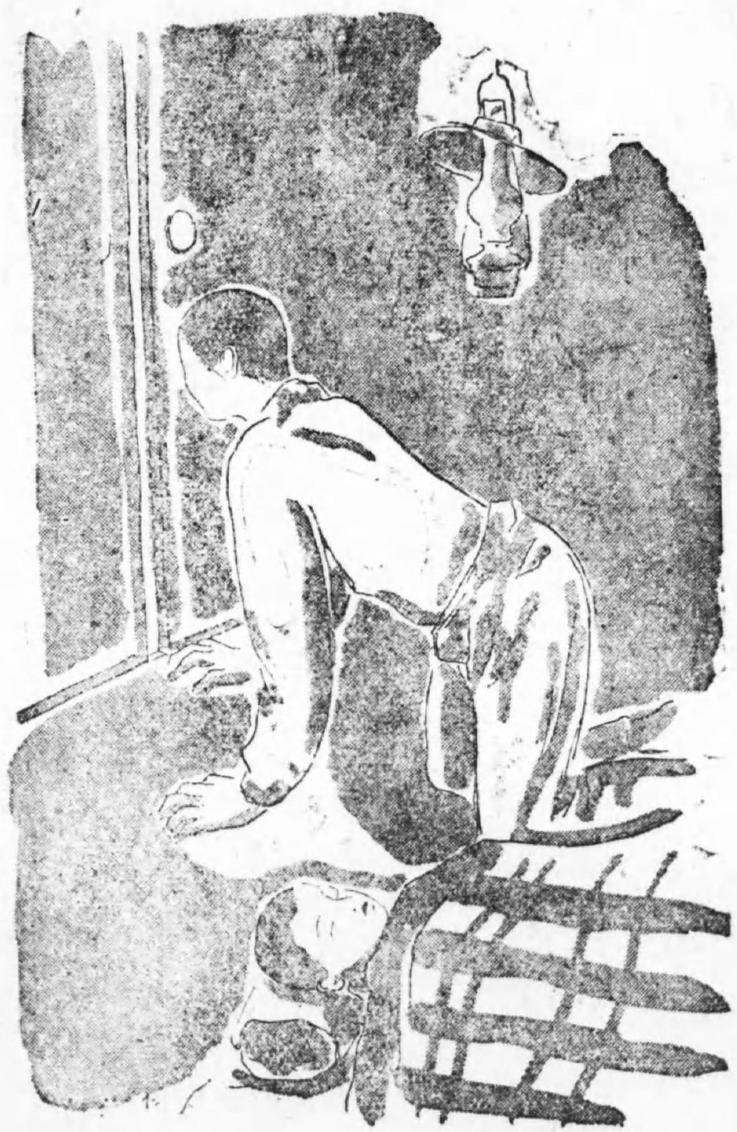
恐ろしき一夜

小さな町の宿の夜は更けてゆく。薄暗い五燭の電燈の下に、太郎は、首をうなだれて、ぢつと考へこんでゐた。トタン屋根には、雨音が激げしくふりそそいでゐる。

「次郎、そんな事はないよ、ね、お前がその人にだまされたんだよ、盲目だと思つて、その人が莫迦にしたんだよ」

「ふん、その盲目には誰がしたんだい？」

「御免よ次郎。兄さんがあやまる——だけど五圓紙幣もらつたなんてことは——」



「嘘だと云ふのかい？　いいや、さう云ふ兄さんこそ嘘つきだ。俺いいよ腹をすかせて、餓死でもしたら、反つて兄さんは大助りだらうよ」

次郎は、さも憎々しげにかう云ふと、クルリ壁の方をむいて煎餅ぶとんをかぶつてしまつた。兄弟は、この木賃宿へ泊ることになつても、屋根代と云ふ、安い泊賃を拂ふと、うどん一杯も喰べられなかつたのだ。

太郎は、ホロリにぢんでくる涙を、拳でそつと押へた。

（ひがんでゐるのだ――盲目だから、――だが、その盲目には誰がした？）

「御免よ、次郎！」

「あやまつたつて駄目だい！　さ、五圓のお札つてどんなものか、俺に觸らせて見せてお呉れ！」

の　眠つたと思つた次郎は、まだかう云ひつづけるのだつた。

「とにかく、ねてお呉れ、ね、次郎、明日、明日の朝は、きつと溫いものを喰べ

させてあげるからね」

併し、太郎には、明日の朝までに、假令五錢の白銅貨ひとつ稼げる方法はなかつたのだ。

すぐ隣りの部屋には、雨にふりこめられて、とびこんで來た、旅の藥屋さんが泊つてゐた。ついさつきまで、算盤をはぢいて、金勘定をしてゐたらしかつたが、もうスヤ〳〵と輕い寢息をたててゐる。いまし方まで響いてゐた銀貨のチャラチャラと鳴る音、幾枚もの紙幣をかぞへる音。それが太郎の耳にこびりついてゐるのだつた。

（あゝ、一枚のお札があつたらなあ……弟の氣持も直るだらうし——太郎は、思はずもそつと腹這つたまま、間の襖の隙間から隣室を覗きこんだ。

うこんの財布が、枕もとに轉つてゐる。手を伸せばすぐだ……

（いけない、いけない。泥棒根性を起すなんて——だが、次郎は……明日も自分

を責めるだらう！）

太郎の胸はドキ〳〵した。はげしい雨の音にも氣づかず隣りの客はグッスリと眠つてゐる……

（いまだ、盜むならいまだぞ……）

爽やかな朝

それから何時間たつたらう。太郎は、とう〳〵思ひきつて、間の襖に手をかけた。ソロリ〳〵と、襖をしのびやかに開けかかつた。一寸、二寸、三寸……その途端である。

「兄さん！」

「——」

次郎の聲だ。ハッとして太郎は身をすくめた。と、次郎は、またもスヤスヤ寢息をたててゐる。

（なあンだ、寢言か！）

太郎は腹這ひになつて、隣室へ手を伸した。

「兄さん！」

次郎の手は、太郎のねどこをさぐつてゐる。

「次郎、な、なんだね！」

「兄さん！　明日、明日の朝は五圓紙幣……」

「うむ、――」

盲目の次郎は、寢言にまでかう云つてゐるのか――さう思ふと太郎は、思はずワッと泣きだした。

「兄さん！　どうしたの？」

「――」

「おや、何處からか風が入るね、襖があいてるんだらう！」

「叱ッ！　次郎！　そんなこと云ふんぢやない……」

「兄さん、どうしたの？」

「うん！　默つて、默つておいで、兄さんはね、兄さんは、あんまりお前が責めるもんだから、つい惡い心を起したんだよ」

「え？　兄さん、それぢやアあの男の云つたことは？」

「あゝ！　嘘なんだよ」

「す、すみません兄さん！　そんなにまでして俺を！　俺を……」

兄弟は抱きあつて泣いた。

唄の「一寸訊くがね」

「え？」

二人はびつくりした。そこには旅の藥屋さんが立つてゐた。太郎はギョッとした。

「お前さん達、諏訪の者ぢやないかね？」

「ええ――」

「幼顔におぼえがある――湖南村の、小口太郎と次郎かい？」

「ええ――あなたは？」

「俺はお前達の叔父だよ、お父つあん死んだ時旅に出てゐてなあ！　實はお前達を迎へかたゞ商賣にやつて來たのよ！」

「叔父さん！」

いつか、夜は明け放れたらしく、爽な朝日が破れかかつた雨戸を透してほのじろくさしこんで來た。

幌馬車の唄

それ迄、といふもの――まだ見ぬ東京の叔父だつた、源五につれられて、太郎と次郎は、谷村の町から、中央線の驛へと急ぐのだつた。

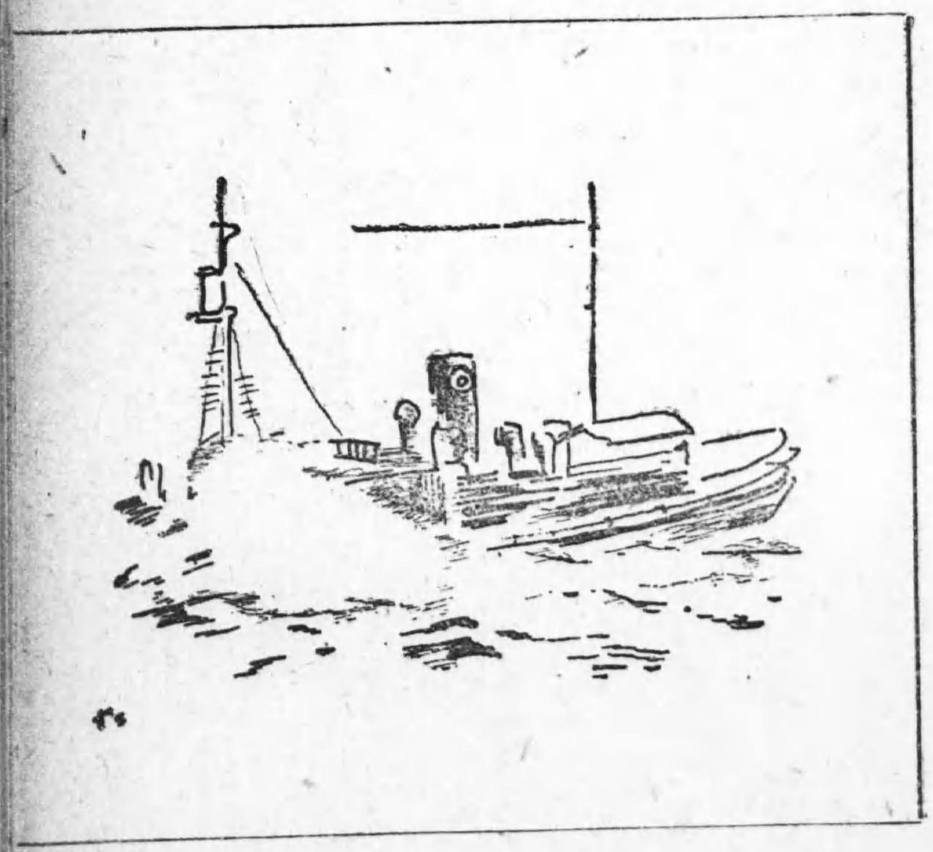
三人を乘せた幌馬車は、雨上りのうすじめつた甲州の野をまつしぐらに驅るのだつた。六月の風は晴れた青空、燃えるみどりに、そよそよと。

次郎は、見えぬ眼にも初夏を感じて朗らかだつた。

搖れて搖られて馬車は往くよ
あの丘越へて谷間を越えて
鞭鳴らせ朝風に
涯ない廣野を唯だ一筋に

いざや往けや勇ましく
蹄(ひづめ)はがらかたてがみ躍る
太郎は顔を赧くいきませて伴奏のハーモニカを吹いた。
「ほらもうぢき停車場だよ」
叔父の源五(げんご)は微笑んで云つた。
みどりの丘の向ふからは高らかに汽笛(きてき)が尾をひいて來る。

荒汐の母



女なれども

お瀧は白髮のまじつた額の生え際から、汗をタラ〳〵流し乍ら、長男一太郎の嫁お米や次男安次郎の嫁にするはずのお文と肩を並べて、

「よーいさ、よーいさ、よーいさ」

と地引網をひいてゐた。

油凪の海上には、小舟一艘出てゐない。

「靜かな海だなあ、魚すくなくつて高いちうに、稼ぎ人はなしかよ……ふふ、俺女だつて箱舟ぐれえ漕るで沖へ出つかよゥ」

「地引ぐれえぢやア追つかねえなあ！」

とお米が云へば、お文は

「魚もゐなくなつたからなあ」

と答へる。

「おうかた戰爭にでも出かけたかな」

お瀧の言葉に三人は明るく笑つた。空には爆音が轟いて翔りゆく海軍機だ。

「お米姉さん、一太郎兄さんのこと思ひ出さねえかえ？」

お文がからかへば

「他人のことよりわが事だ、あの汽船の煙見たらおめえ安次郎さんへ手紙でも出したらいゝだ」

餌に喰ひつくな

「いけねえかい、おつ母、町のネジ工場へゆけば、一日二圓も三圓もとれるんだ

がなあ」

末三郎はどうしても思ひきれないのだつた。

「餌に喰ひつく魚みてえな事云ふでねえ。眼の先の慾かいて、家の稼業捨てたら兄さ達に濟むか濟まねえか考へるがえゝだ」

薄暗い電燈の下で、母のお瀧は、針の手を休めようともしなかつたが末三郎は釣道具や網の手入れも忘れて、

「だけどおつ母、いまどきこの濱から、好い若え者で舟出してるなあ、俺だけだせ。戰爭に征つてる一太郎兄さだつて、圖南丸に乘つてる安次郎兄さだつて、怒りやアしめえと思ふがなあ」

「怒るとも——戰爭に征つたつて荒汐育ちの一太郎は立派な海軍さんだ。荒鷲だよ。安次郎は鯨を追掛け廻して世界中の漁師と腕比べしてるだ。それをおめえばかり、金に眼がくれて陸仕事してえなんて、海で死んだお父つあんに申譯がね

え」

「だけどおつ母！」

「えゝ、だけども何もねえ、漁師やお百姓がみんなネジ工場へ行つて見ろ、ネジが喰へるかい？　お米や野菜や魚はどうなると思ふだ、誰が作るだ、誰が獲つてくるだ？」

いつにないお瀧の權幕のあら〳〵しさに、末三郎は默つて首をうなだれ、お米はは〳〵するばかりだつた。

悲しき思ひ出

お瀧は立上つて、汚い小さな佛壇から亡き夫の位牌をとり出した。ぢつと見詰める瞳には、追憶の涙がにぢんでくるのであつた。大正十二年九月一日、末三郎

十一時五十八分、
て來た大地震。異樣な
横倒しになる家、濛々た
「つなみだぞゥ！」

が漸く三歳の夏——夜も明けぬ暗い濱邊から、四艦橋揃へて
「えんや、えんや」
と漕ぎ出した漁船の中に、夫の金刀比羅丸もまじつてゐた。
晴れるかと見えた空が曇つてバラ〳〵雨。ぶきみなむしあつさが邊りにたちこめると、午前ゾゾーンと突きあげ、搖りあげ地鳴りを伴つて、前へのめる家る土煙りだ。

「逃げろよゥ！」
お瀧はつぶれた家の軒下から、末三郎を横抱きにしたまゝ、小學校のある裏山へと逃げた。教室から運動場へ避難してゐた長男一太郎や次郎安次郎は、お瀧の姿を見るなり駆けよつて、
「おつ母、おつ母！」
と泣いてすがつたが、心配なのは沖へ出てゐる夫の船である。
見渡す限り干潟になつた海は、いまや押寄せて來た數丈の高浪が猛り狂つて轟々と唸いてゐる。
「あッ、船が船が……ああッ」
お瀧は三人の子供を抱きよせたまゝ氣を失つてしまつた。夫の船はその時限り、待てども待てども沖から濱へ戻つては來なかつた。

呪はしき煙突

「やつし、やつし、やつし、やつし」

お瀧とお米とは末三郎に力を協せて、小さな箱舟を渚へ押出した。

「ボン／／でゆけりやア譯なしなんだがなあ」

末三郎はガソリンのきれた小さな發動機を怨めしさうに眺めて云つた。

するとお米も、

「ほんとにねえ……」

とあひづちをうつたのだつた。

「せいたく云ふでねえ、十五年二十年前、お父つあんの頃にやア、腕の筋鐵で漕いだもんだ」

「わかつたよおつ母、俺も筋鐵で行つてくらあ」

末三郎が櫓柄をつかんであざやかに漕ぎ出せば、箱舟は波のうねりに乘つて眞一文字、沖へ沖へと進んだ。

「ねえ、お母さん、どうでも末さ沖仕事へ出すのかえ？」

とお米が訊いた。

「出すともさ、漁師だものな」

云ひかけてお瀧が見れば、砂丘には二三十艘も漁船が引揚げられてゐて、しかも一月二月海へ泛べたこともないのか舷など乾きゝつてゐる。船底を覗くと發動機は銹ついたまゝだ。

「チヨッ、何ちうざまだい、この村あ。先祖代々漁師が稼業だ、船持つて網持つて、釣道具あつて誰一人沖仕事へ出る者がねえなんて、ああ勿體ねえ……」

砂丘を越したはるか彼方には、町のネジ工場の煙突がそゝり立ち、黒い煙りを

もく〳〵と吐いてゐる。

「あれがいけねえだ、魔物だ！」

お瀧は煙突を睨みつけるのだつた。

父は生きてる

「お母さん！　丈夫ですか？　僕は元氣です。昨日も〇〇海軍基地から數時間に亘る海洋飛行場を爆破し、格納庫や敵機を粉碎して歸りました。僕の機は大小七十機の敵彈を各所に受け、發動機一個と命の綱の無電機をも射拔かれ操縱困難を感じましたが、殘りの發動機をたよりにチンバ飛行をつゞけ颱風吹き荒ぶ海へと出ました。その時の嬉しさは何とも云へませんでした。お母さんがいつも云つてたやうに、僕は生れて海で育つた、死ぬのなら海でとかねがね願つてゐたその海

へ出られたのです。日は暮れかゝつて霧だか靄だか濛々としてゐます。僕は幼な心におぼえてゐるお父つあんの顏をまざまざと見ました。こつちだよウ、こつちだよウ――とお父つあんがよんでくれてゐるのです。僕はその聲をたよりに操縱をつゞけました。そして無事基地に戻れたのです。お父つあんは死んぢやゐません、海の中に生きてゐます。お米や末三郎によろしく。一太郎」

手紙を讀んでゐたお米がポトリ涙をおとせば、きいてゐたお瀧も胸迫る思ひで、

「お米、有難うよ、一太郎は惣領だけあつてええ事云ふてくれる、お父つあんは死んぢやアゐねえ、生きてる、海の中に生きてるとなあ……まつたくぢや、まつたくぢや」

あとは下うつむいて鼻をすゝるのであつた。

いか釣り夜船

「いまが季節だで、せつせと釣らにやア、戰地の正月の間にあはんでのう」

と役場では大騒だつた。が、若い働きざかりの漁師は町のネジ工場へ通つてゐて濱には老人ばかり、末三郎だけが若い者だ。夕ぐれから雨氣をふくんだ雲が低く垂れてあらし模様、誰一人沖へ出る者もないので、末三郎は肩をそびやかして、

「百でも二百でも俺釣つて來らあ、一太郎兄さの正月肴になるかしれねえでなあ！」

と漕ぎ出していつた。トップリ暮れて闇夜となつた海上に明滅する灯がひとつ、波にもまれてうきつしづみつしてゐるのは末三郎の舟に違ひない。その夜半突如

として颱風が襲つて來た。雨を伴ふ吹き降りのはげしさ。ぐしよぬれになつて濱へとび出したお瀧は、

「お米、灯が、灯が見えねえぞウ！」

「末さ、どうしたゞかさ……」

濱へ集つた漁師連中も、うづまく風や波に尻ごみするばかりである。

「末やあい！　末やあい！」

お瀧は渚に立つて叫んだが、答へるものはよせてくだける波音ばかりだつた。

「島蔭廻つて三里ケ濱へでも舟つけたに違えねえ、おふくろさん、心配しちや身體に毒だ、夜明けを待つたらぢき判るで」

と、なぐさめる人々をはらひのけるやうにしてお瀧は叫んだ。

「末は死にやアしねえ、うちのお父つあんがきつと助けてくださるだ」

漂着したものは？

翌る朝のこと――まんじりともせずお瀧とゝもに一夜を明したお米が井戸端へ出ると、雨風も止んでだまされたやうな上天氣――晴れた空の下をお文が驅けて來た。

「お米姉さん、大變だあよ」

「え？」

「おつ母に云つてくれちやア困るが、三里ケ濱へ流れついたとよ！」

「え？　末ちやんが？」

「うゝん、金刀比羅丸の櫓と、末ちやんの着てた厚衣がよ」

「え!?」

お米はまつさほになつた。

「役場へお米姉さんに來ておくれつて……そいで、おつ母には内緒にしとくだつて――」

「いまゆく――」

お米は急いでお文とつれだち、役場へ急いだ。駐在巡査立會ひの上、見せてもらふと、正しく末三郎の乘り出した箱舟の櫓であり、その時着ていつた厚衣であつた。

「箱舟がひつくり返つて、末さん泳いたんだなあ、櫓をつかんで、その中とう〳〵――」

役場の書記の想像はたしかだつた。きいてゐるうちにお米とお文とは抱きあつて泣き出してしまつた。

「一太郎さんは出征だし、安次郎さんは圖南丸だ。うつかり知らされん、それで

當分おつ母にも内緒だぞ、いゝか、行衛不明ぐれえにしてな！」

駐在巡査もそつと眼を押し拭つた。

重る悲報

心配したほどのこともなく（行衛不明）ときかされたゞけでお瀧は失望しなかつた。

「お父つあんが助けて下さるわい。大島へでも流されてるか知れねえ」

佛壇にむかつて（無事にゐますやう！）と拜むのであつた。お米はホッとしたらしく、隣村の實家へこの事をしらせに出掛けた。その留守のことである。

「おつ母ゐるかね？」

と入つて來たのは村役場の兵事係に在郷軍人會の人々だ。

「驚くでねえよ、おつ母、倖ひお米さんがゐねえやうだからしらせるがね、實は一太郎さん戰死なすつたゞ」

「ええッ？　一太郎が？」

「委しいことは判らんが、とりあへずきたしらせに依ると〇〇空襲爆擊多大の效果を收め、遂に敵高射砲彈機關部に命中、もはやこれ迄と敵飛行基地めがけて自爆壯烈なる戰死を遂ぐちうだ」

「はい、有難うございますだ、どうせお國へさしあげた倅、お役に立てば何よりでございます、だがなあ旦那樣」

「なんだね？」

「この事嫁のお米にだけは當分内緒にしておいてお貰ひ申してえだが、お米は身重のことだし……」

「あゝ、いゝとも——しつかりしたおつ母だなあ！」

みんなは顔を見合せて肯きあつた。

空を飛ぶ言葉

一望まつしろな氷山と氷山との間を紺碧の荒汐がさかまいてゐる。その波瀾をわけて捕鯨船はまつしぐらに走るのだつた。めざす鯨の背に射ちあてたモリは數本、ロープはピーンと張りきつて、苦しまぎれに逃げる鯨にひかれて走る走る。それも一刻。やがてロープがゆるめば、鯨も力がつきはてたのであらう。獲物を曳いて母船圖南丸へと戻るのであつた。

安次郎は一番射手だ。今日の手柄ばなしに胸がはづむ筈だのに、何故か不思議と氣が重いのだつた。

「どうした、顔色が悪いぞ」

「珍らしく氣になるんです。出征してる兄貴のことや家のことが――」

「そりやアいけない、無電でもうつたら如何か、ブジだと云ふしらせをもらやア明日はまた愉快に活躍出來るだらう」

さう船長に云はれて安次郎は夜半の無電室をたづねた。

「ミンナブジカゲンキカカワリナイカコチラハマメデキルヤスジロウ」

安次郎は無電技師に訊いた。

「いつ頃返事がくるでせう?」

「さあ、はやくて明日だね、こつちは直ぐかうしてうてるが、向ふが直ぐうてないからなあ」

さう云ひ乍ら無電機をコツ〳〵叩きはじめた。中繼の局が船をよび出してゐるのだらう。安次郎は自分の言葉が空をとんでゆくことを想ふと胸がドキ〳〵した。

誰も泣かない

お瀧は一太郎戰死のしらせを胸に秘めてゐたし、お米は末三郎の死をお瀧にかくしてゐた。しかも二人はむかひあつて地引網の手入れをしてゐるのだつた。その時電報配達が入つて來た。

「電報だよ！」

「えゝッ」

二人は顔を見合せた。みる〳〵うちに蒼ざめていつた。互ひにかくしあつてゐた事が知れたかと思つたからである。

處がふるへる手で封を切ると安次郎からの電報であつた。

（蟲がしらせたんだなあ！）二人ともおなじやうなことをおもつた。

「どうするえ？　おつ母」

「無事だとも打てんしなあ！」

思はずお瀧は呟いた。

「え？」

「それぢやア、おつ母は知つてゐるのかえ？」

「お米、おめえも知つてたのかえ？」

「ええ！」

「それぢやア云ふがなあ、氣を落すなよ、一太郎は戰死したゞぞ！」

「え？　末さんのことぢやなく——」

「末は駄目だつたのかえ!?」

二人は互ひにかくしあつてゐた事を始めて知つたのだつた。が、二人はぢつと耐へて泣かなかつた。涙ひとつこぼさなかつた。

「俺の子供はお父つあんの後追はせてみんな海へさしあげちまふだ。安次郎へ電報うつてくれやお米、いゝか、ダレモナカネエカラオメエモナクナとな……」

荒汐(あらしお)の母お瀧は凛(りん)々しく云ひきり顔をゆがめてにつこりとした。

大空に生きる

た

丘上の墓

信二は今日も丘上の兄の墓に詣つた。脚下にひろがるいぶし銀の湖は、薄紫にたそがれて、遠く西山に沒しかけた夕陽が、ささやかな墓標をほんのりとあかく照してゐた。

「兄さん！　俺らどうしたらよからうなあ？」

信二は墓の前にしやがんで、懸命な顏つきをしてかう問ひかけるのだつた。

「せめて作つて喰ふだけの田畠でもあつたらともかく、馬を賣らなきやならねえ！　その金だつてお母さんや妹達が幾月喰つてゐられるだか……」

兄の國松が國境守備兵として出征中、名譽の戰死を遂げてもう直き一年にならうとする秋だつた。墓標は雨風にさらされてゐたが未だに生々しく、土饅頭に生

ひ茂つた雜草は枯れて、もう邊りの野にも山にも手向ける花さへ咲いてはゐなかつた。

と、鍛かげから唄聲がきこえて來た。

へ西へゆく汽車　見送るたびに
思ひ出します　兄さの首途
兄さ滿洲で　兵隊ぐらし

「美代ちやんぢやねえか？」

信二がよびかけると、

「ああ、信二さん！」

夕闇に白い顏が泛んでにつこりとして近づいて來た。

「妾もお詣りしてゆかう」

隣りに住む美代は枯れ草に膝をついてほつそりした掌を合せた。

「信二さん、太鼓が鳴つてゐるよ！」
「うむ！」
村では遲蒔ながら、刈上げ祭りなのだつた。
「ゆく？　ゆかない？」
「祭へかい？」
「ああ！」
「ゆくもんか」
信二は怒つたやうな聲を出して首をふつた。
「俺とこなぞ、ちよつとばかり小作しただけで、年を越しやア喰ふものもありやしないよ」
美代は眼に涙をうかべて肯いた。
「繭も駄目だし、製絲も不景氣だし、祭りどこぢやないね」

「さうだとも――」
「だけど妾ね、お宮へお詣りしてゆかうかと思ふの、明日東京へ行つちまふんだから」
「え？　東京へ？」
信二はびつくりしたらしく、美代の顏を見つめた。
「信二さんもゆかない？」
「冗談ぢやないよ！」
と云つたが美代は眞顏なのである。
「俺が行つちまつたらお母さんや妹達がどうなると思ふ？」
「だからよ――」
美代は手蔓を求めて、東京の羽田に在るM式パラシュート製造所へ縫工として雇はれてゆく事になつたのだ。

「だから信さん、あなたも思ひきつてパラシユータアにならない？」
「何んだい、そのパラシユータアつてのは？」
「つまりパラシユートをつけて飛行機からとびおりる人よ、そのM式パラシユートがどんなによく出來てゐるかつて事を廣く世間の人に示したり、航空知識をひろめる爲に、あつちこつちで催される飛行大會なんかで、實演して見せたりするのよ、これから三年五年たつとパラシユートは大變役に立つんだつて。妾にはよく解らないけれども」
「ふうむ！　飛行機からとびおりるのか！」
信二の見上げた空はもうとつぷりと暮れて宵の明星がちか〳〵と光つてゐた。
「どう信二さん、隨分男らしい仕事ぢやないこと。妾達がそのパラシユートを縫ふのよ。それを信二さんが身體へつけて大空からとびおりるとしたら……」
美代は憧れるやうなまなざしを大空になげかけた。

「美代ちやん、今夜中考へさせてお呉れ、もしなりたいと云つたら世話してくれるね？」
「大丈夫、それにお金だつて相當に貰へるさうよ。さうすれば家へ送れるし、第一お國の爲になる仕事ぢやないの！」
「さうだ！　さうだね美代ちやん、命を的にしても、うむ、國の爲になる仕事だ。そして男らしい仕事だ！」
丘を越へた向ふの鎮守の森からは刈上げ祭りの太鼓がのんびりと響いて來た。

賣られて行く馬

その夜信二はまんじりとも眠れなかつた。バラシユータアを志願するか、しないか、それに迷つてではなかつた。勿論彼は東京へ出てバラシユータアにならうと決心した。戰死した兄に代つて一家を支へなければならなかつたからだ。が、明日は賣られてゆくことをさとつたものか、ながい間飼はれてゐた黑馬が、馬舍の羽目板を蹴つて悲しげにいななくので彼は自分が責められてでもゐるかのやうに胸苦しく眠れなかつたのである。

朝になると、町から馬喰がやつて來て、黑馬をひき出し、街道の電信柱へつないで、母のおせきと値段の交渉をはじめてゐた。

おせきは涙をホロ〳〵こぼしながら馬に人參を喰べさせ、

「よく働いてくれたになあ……可哀さうに！」

とぶつ〳〵

「どうだ

洲で

呟いた。

いお袋さん、思ひきつてうんとはずむせ、この馬あ滿

戰死しなすつたこの家の兄さが、可愛がつてた馬だ

しするからな」

馬喰は慰めるやうに大きな聲で喚きながら、

「百圓でどうだい？」

と云つた。

信二ほ床の中でこれをきくと、急いでとび

起き表へ出ていつた。

「お早よう……」

母のおせきはホロ〳〵泣きながら人參を喰べさせてゐた。

「ねえ、兄さ、　百圓つて云やア、少し値がよすぎる位だせ」
「さうかなあ……」
信二はせめて二百圓位ゐなことを云つてやりたかつた。併し、この黒馬は戰死した兄が運送挽きになくてはならない馬だつたし、自分も幼い頃から馴染んでゐた馬だしするので、もしやバラシューターとして相當な金がとれるやうになつたら買ひ戻したいと考へた。
「小父さん、これでまだ働けるだらうね、まさかひどい眼にあはすんぢやなからうね？」
「ひどい眼？　あはははは……屠殺場へでもやるかつて云ふのかえ？　滅想な、そんな事するんだつたら、もつとつぶしの値段にするよ」
「それぢやア來年の春か夏が來て、もしこつちで買ひ戻したいと云つたら戻してくれるだらうね」

「ああいいとも、金利さへ充分よこしてくれりやアな」
母のおせきは信二と馬喰との對話をはらはらしながらきいてゐた。來年の春はおろか、何年經たうと買戻すなんて事は思ひもよらない事だと云はんばかりに、
「信二、買ひ戻すなんて事を考へずに、もうちいつと値をよく買つて貰へないものかねえ」
ふるえ聲でそつと呟いた。
「いけねえ〳〵、　百圓以上一文だつて出せねえ、そんな馬ぢやねえんだからなあ、さ、よかつたら　百圓、ほら、現金だよ！」
馬喰は土間へ踏みこんで、上り端の處へ十圓紙幣を十枚並べた。
「勘忍しておくれよ、黒馬、達者でくらしなよ、な、いいか？」
おせきは馬の鼻頭を撫でてやり、涙をすすつた。
「いいか、黒馬よ、待つてろ、きつと買戻してやるぞ、來年の夏になつたらな」

信二もたてがみをやさしく撫でて、かう云つた。

黒馬はさびしげにいなないた。

「それぢやアいいかい、曳いてゆくぜ」

馬喰は立ちあがつて、馬の手綱をとつて街道をひき出した。

「待つとくれ、小父さん、そこまで送つてゆくから」

信二は一緒に手綱をとらうとした。

「ええ、未練がのこつていけねえよ、さ、手綱はわしがひいてゆく！」

馬喰は冷やかにかう云ふと、馬をひき出した。

かつ〳〵と鳴る蹄の音も力無く響いた。

母のおせきは前掛けで涙を拭き〳〵見送つてゐた。信二はその後を追ふやうにして急いだ。と、街道を土埃あげて、一臺のバスが走つて來た。

ふと見あげると、美代の顔がのぞいてゐた。

「あッ！　美代ちやん！　俺らゆくせ、ゆく事に決心したせ！」

と叫んだ。

「待つてるわ、きつとね！」

走るバスの窓から一枚の名刺が投げられた。ヒラ〳〵と舞ひおちるのを追つて信二はやつと拾つた。

「東京、羽田、M式パラシュート製作所……」

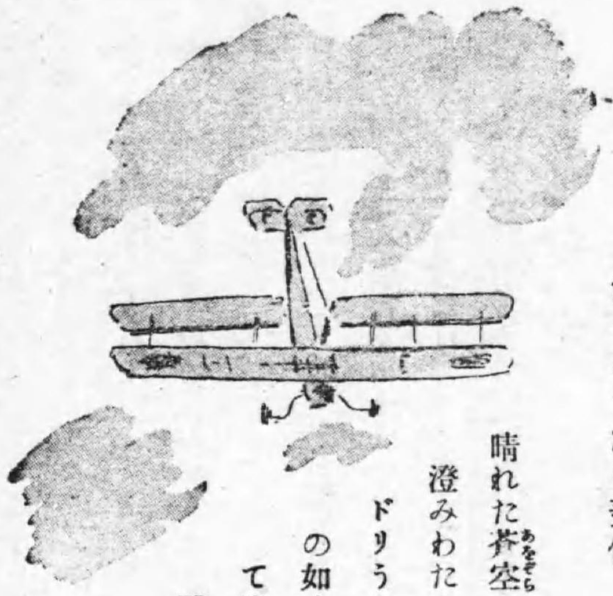
（さうだ、此處へ願書を出せばいいんだな！）

遠く去りゆく黒馬は再び三度さびしげにいなないた。

「黒馬よ、達者でゐろよ、いいか、直き迎へにゆくぞ！」

信二は名刺を左手に握りしめ、右手をたかくふつて別れを惜しんだ。

美代をのせた乘合自動車は、もう遠い堤の上を走つてゐた。



命をあづかる美代

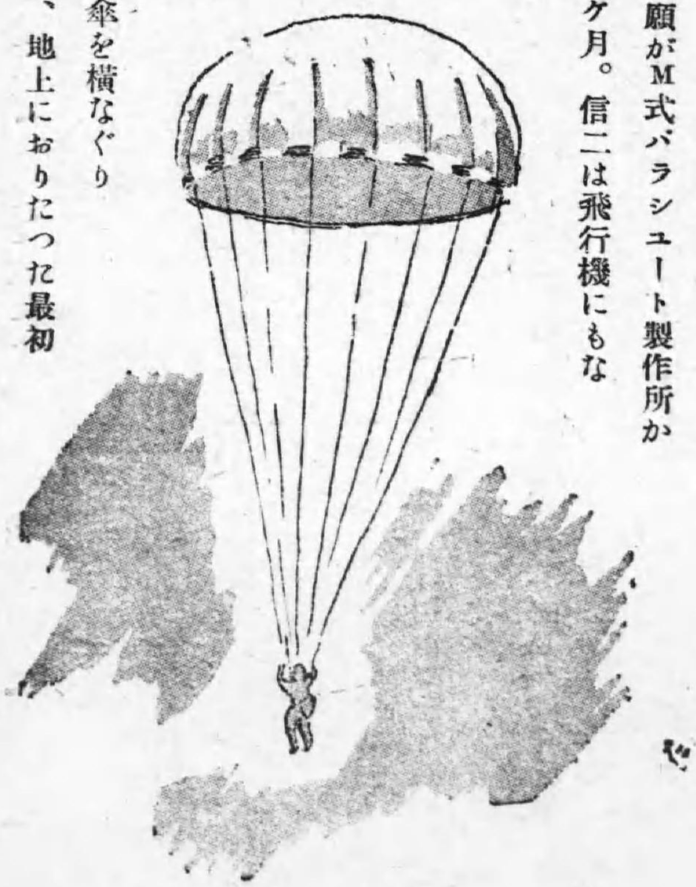
晴れた蒼空には雲一つうかんでゐない。おだやかに澄みわたつた大空をゆく銀灰色の飛行機からモンドリうつてパッととびおりると、はじめは彈丸の如く一瞬、息づまるやうな苦しさで落下してゆくが、一秒乃至二秒の後、グーンと身體がはずんで抵抗をおぼえる。と、空にはまぼろしのやうな白い落下傘の花が咲いて、身體はそれにつりさげられ、ゆるゆると地上をめざ〻て、おち

てゆくのであつた。

パラシュータア志願がM式パラシュート製作所から許可されてもう三ケ月。信二は飛行機にもなれ、再三の落下にも成功して一人前のパラシュータアになつてゐた。

併し、地上に近づくと反つて危險が多かつたのである。

突風が大きな落下傘を横なぐりに襲ふ場合もあるし、地上におりたつた最初



の瞬間、その激動を巧みに避けないと、脚をくちく恐れがあつた。

だが今ではそれにも信二は熟練してゐた。

のどかな春の大空から下つて、飛行場のやつと芽をふきだしたばかりの芝生におりたつと、製作所長の竹柴さんが嬉しさうに驅けよつて來た。

「御苦勞々々、巧くなつたよ信二君！」

空には信二を運んだ飛行機が地上へおりたつた彼を見とどけてからほつと安心したらしく着陸の姿勢をとつて、プロペラの廻轉を止め、空中滑走をはじめた。

「信二さん、恐くない？」

美代は信二が落下する時に限つて、所長の許しを得ては心配さうに飛行場へ驅けつけて來るのだつた。

「なれちまつたから恐かないさ、愉快だよ、まるで搖籃にでもゆられてるみたいさ」

信二は微笑んで見せた。

「でも氣をつけてね、妾も一人前の縫工になれたのよ、だから——」

「だから、なんだい美代ちやん」

「妾ね、あなたの實驗するバラシュートだけは他人任せにしないわよ。妾が責任もつて縫ふことにしたのよ」

「さうかい、賴むよ美代ちやん、僕の命をあづけるぜ」

「大丈夫、確にあづかつたわ」

竹柴所長は朗らかに笑つた。

「成程、こりやア好い、君達二人がコンビになつてやつてくれれば、どちらも細心の注意をしてくれるだらう。賴むよ」

飛行場には銀灰色の翼をひろげて飛行機がゆつたりと着陸した。

「ああ、妾も乘つて見たいわ、妾にだつてとびおりられてよ」

「ちやア僕が縫ふ方へ廻るか……」

「駄目々々、それこそ危なくて」

美代と信二とは子供つぽく笑つた。

うららかな春日和である。

悲しき遺書

「信濃の春は遲けれど秋立つ事はいと早し——と唱歌にある如く、陽春とは云つてもまだ殘んの雪がアルプスの連峯や八ヶ岳の峰々に白く光つてゐた。

M式落下傘實演大會は甲府で、上諏訪で、つづいて松本でと公開される事になつた。

誰よりも喜んだのは信二と美代の二人だ。信二は故郷の空に舞ひおりる自分の

勇姿を描くと同時に、可愛い黑馬を買ひ戻す機會が到來したなと思つた。美代は一時信二の母親おせきから、信二を東京へ誘惑したかの如く誤解されたが、それを解くには何よりの機會だと考へてゐた。また縫工としての責任上、特に竹柴所長の許しを得て一行と共に旅行する事になつた。甲府での實演は無事に終了して、上諏訪は湖を越した對岸の岡谷で天龍河原に近い赤沼の堤を滑走場として飛行する事になつた。銀灰色のはやぶさ號がすでにプロペラを廻轉してゐる。信二は唇をキリリと嚙みしめて機上の人となつた。

數千の人々の歡呼拍手の中に機はグングン上昇していつた。機上から眺めると、信二にとつて忘れがたい故郷の村が眼下に擴つてゐる。兄が靜に眠る丘上の墓もそれと指さされるばかりである。

（あッ、黑馬がないてゐるぞ！）

思はずかう呟いたものの耳を聾するばかりの爆音に苦笑した。

（あんまり氣にしてゐるからだなあ！）

機はグン〳〵上昇して高度計は五百米を示してゐた。操縱者は隻手をあげて『用意せよ！』と合圖した。信二は座席から立上つて翼の支柱をよく見定め落下の姿勢をとつた。

「よしッ！」

操縱者の隻手がサッとふられる。それを合圖にパッととびおりた。彈丸の如く落下してゆく、一秒、二秒、三秒……

「あッ！　しまつた！　開かない！」

信二はハッとした。その瞬間、唇をついて出た叫びは、

「お母さん、お母さん、お母さん！」

湖畔の堤に群つた、數千の人々は同鄕出身の信二少年の落下ぶりを見まもつてゐたがパラシュートは遂に開かなかつた。ワーッと云ふおびえきつたやうな叫び

聲がまき上ると誰も彼も掌で顏をおほつた。空に旋廻してゐる飛行機の爆音までがぶきみにきこえる。天龍河原へ墜落、卽死をとげた信二は、無念さうに齒を喰ひしばつて慘たらしくも血まみれになつてゐた。

群集の中にまじつてゐた信二の母おせきは小さな妹を抱きしめたまま、

「ああ、信二、信二はもう歸つて來ちやアくれねえだか？」

唸くやうに叫んだまま卒倒した。

竹柴所長は、蒼白な顏をひきつらせたまま、突立ちあがつて聲を限りに群集へよびかけた。

「諸君！　お靜り下さい、M式パラシュートは世界無比なものと私は信じてゐました。然るに斯くの如き大失態を演じまして……」

その時、竹柴所長を制するかの如くとび出して來たのは美代だつた。

「所長さん、妾をお使ひ下さい。必ず立派に落下してお見せいたします」

美代はもう泣いてゐなかつた。蒼ざめてはゐたが、雄々しげな決死の相が顔にみなぎつてゐた。

「何？　君が、君がとびおりると云ふか！」

「はい、命にかけても成功して見せます。M式パラシュートは必ず開くべき筈なのでした。必ず開かせて見せます。どうぞ！」

「よし！」

一度混亂に陷つた實演大會場は、信二の死骸が收容されて後、再びはやぶさ號のプロペラは廻され、機上には美代が落下者として乘組んだ。

「大丈夫か？　よした方がいいと思ふがなあ」

操縦者が心配さうにふり返つた。

「大丈夫、やつて頂戴、七八百米位からとびおりてよ！」

「OK！　高い方が安全だ！」

爆音たてて飛行機は舞ひあがつた。三百、五百、七百米と高度計はグン〳〵昇つてゆく。

「よしッ！」

操縦者の隻手はさつとふられた。

美代は眼をつむつたまま、バッととびおりた。全く無我夢中である。一秒、二秒、彈丸の如く落下してゆくうちにバッと開いた落下傘の花。グンと抵抗を感じると美代ははじめて眼をあけた。見あげる空には見事開いた傘の花。眼下には歡呼拍手する數千の群集。

その時美代は鋭利なナイフをとりだすと、自分の身を支へてゐる落下傘の綱をプツリプツリとたちきつた。

開かぬパラシュトの爲に命をおとした信二少年。M式パラシュートの名譽のため七百米の高空に美しい傘の花を咲かせ乍ら、自ら生命の綱を斷ちきつて、彈丸

の如く墜落慘死をとげた美代。

二つの悲しき骸は白木の棺を並べて火葬されることになつた。

棟の低い田舍風な、小さい赤煉瓦で築かれた火葬場からは、ゆら〳〵と煙りがたち昇つた。

竹柴所長は心から二人の死を哀悼しつつ新聞記者に發表した。

「美代さんの遺書が發見されました——（信二さん許して下さい）唯だこれだけ走り書かれてありました。つまりパラシュートの縫工としての責任上、死を決したものでせう、健氣でありその友情は美しいと思ひます」

さう云ひ終るやワッとばかり聲をあげて男泣きに泣いた。

二つの骸を燒く煙りはゆら〳〵ゆらゆらと立ち昇る。二人が憧れた大空へと。

これから十年の後、わが皇軍の落下傘部隊は、メナドにパレンバンに、素晴しい戰果をかちえた。いまにしておもへば、二人の少年少女が犧牲こそまことに尊い。

純情の勝利

師の心づかひ

「笠井君！　笠井君！」

肩を叩かれて、達二は、ハッと、眼をさました。側には受持の、中戸先生が、當惑したらしく立つてゐた。

「先生！　許してください、申しわけありません」

先生は、無言のまゝ、教壇へもどつていつたが、達二はかりにも、授業時間中に、居眠りをした自分の不甲斐なさを、涙ぐむで後悔するのだつた。

「理由はともかく、居眠りをするなんて、恥しいことだ。しかも級長でありながら――」

放課の鐘がなると達二は、すぐ、先生の後をおつた。

「先生！」

「後でよく話さう、心配しなくてもいいよ」

「――」

達二は、叱られるかと思ひのほか、反つて、やさしく、慰められるやうに、かういはれると、いよ〳〵、身がちぢまる思ひをするのだつた。

終業の後――中戸先生は、達二を招いて、運動場の片隅へ、歩いた。新緑の葉かげ、朗らかな陽ざしをうけた、ベンチへ並んで腰かけると、

「先生、申しわけございません、許してください、居眠りなんかして……」

「いや、僕はね、そのことを責める氣はしない。しかし笠井君、事情もいろ〳〵あらうが、いま、君のしてゐる仕事は、すこし無理ぢやないかね？」

「はい――」

達二は、さう答へたまま、あとは、ぢいつと、地面の一點を、見つめてゐた。

「登校前に、納豆を賣り歩くことが無理なのだらうか、それとも、野菜の夜店を出すことが無理なのだらうか？」

育ての親の爲に

達二の家は、貧しい八百屋だつた。しかし、彼はそこで生れたのではなく、大野夫婦は育ての親だつたのである。いまから十三年前、達二が生れて間もないころ、生みの親笠井隆介夫妻は事業に失敗して、達二を里子に出したまゝアメリカへ渡つてしまつたのだ。その當座こそ、里扶持もきちん〳〵送金されてゐたが、わづか半年ばかりで、音信もプツツリ絶えてしまひ、それから今日まで、八百兼とよばれてる大野兼吉に實の子同樣育てられてきたのだつた。いよ〳〵、小學校へあがるといふ日の朝——眞實の父親だと思つてゐた兼吉が、涙を眼にうかべて、

このことをはじめて打明けてくれた。

「いいか、達二、笠井達二、これがお前の、眞實の名だぞ、だから學校ちやア先生もお友達も、笠井君とよぶからな、忘れるなよ、いいか、なあに、ぢき、大野達二としてやるが、今日、明日てえわけにやアいかねえ、お前の眞實の、お父つあんが、承知してくれなくちやア——第一、その居處がいまは判らねえんだからな」

達二はさう云はれても、まだ、はつきりとは納得できなかつた。

「學校だけは笠井で、家へ歸れば、八百兼の子だから大野だ、をかしいなア」

そんな風に考へてゐた。が、それも一年か二年のことで次第に、生みの親と育ての親とを、思ひ比べるやうになつてきた。貧しいとはいへ、なに不自由なく達二は若竹のやうに、スク〳〵と育つて、學校の成績は拔群だつたし、體格も優秀、病氣と名のつくものは、ただの一度、はしかで、臥たばかり、風邪もひいたこと

がなかつた。

尋常五年になると、西郊小學校を代表する野球チームの投手に推され、その强肩と强打とは、野球大會のある度毎に、敵軍をして、

「西郊の笠井！　あいつは苦手だよ！」

と恐れさせてゐた。

ところが、尋常六年の第一學期に入つて間もなくのこと。春季休業中から、義父の兼吉は病臥の身となつて、櫻が咲いても、散つても、起きられさうになかつた。

「世間一般に不景氣なんだ、だから俺も、店の不景氣をぐちらうたア思はねえ、しかし、こんな因果な病氣にならうたア――」

兼吉は、痩せ衰へた顏を、歪めて呟くのだつた。店先に賣殘つた野菜物は、汚くしなび、客足は日毎に遠ざかるばかりだつた。

「お父つあん、僕に納豆を賣らせてくれないか、きつと、儲けてみせるせ」

兼吉は、涙をポロ〳〵とこぼした。

「許してくれよ、そんなことを、させる氣はなかつたんだがなア――」

達二は、一里に餘る町々を、納豆かごを背負つて賣り歩き家にもどると、大急ぎで、西郊小學校へ驅けつけるのだつた。しかも、この頃では、夜店を出してゐた義母のお峰までが、疲れをおした無理がたたつて、心臟を弱め、呼吸を苦しげにはづませながら、荷車をひいて出る姿に、默つて見てはゐられず、その方も手傳ひはじめたのだつた。

「もう少しの辛抱だ。達二や、許してくれよ、な、我慢してくれよ、俺の病氣さへ直りや、きつと中學へ通はせてやるから入學試驗の準備をしなくちやア――」

兼吉は床の中から、掌を合さんばかりに、感謝してゐた。

アメリカからの迎へ

中戸先生は、達二が默りこんでゐると、

「實はね、笠井君、これは、大野のお母さんから頼まれたんだが君のお父さん、つまり、眞實のお父さん、笠井隆介といふ方が、いまではアメリカで、素晴らしい成功をしてゐることが判つたのだよ、それでね——」

達二は、驚きもせずに手をふつた。

「あ、先生、その事なら、僕もう、知つてゐるんです、どうかやめにしてください」

中戸先生は、あつけにとられて、

「どうして君は？」

「實は悪いことかも知れませんが、二三日前盗みぎきしてしてしまつたのです。一昨日でした、見慣れない人が、お父さんとながいこと話しあつて歸りました。それが、笠井の依頼をうけてきた人だつたのでせう。その晩に限つて、お母さんが、夜店の仕事を休んだので、僕變だと思つてゐました。ところが、僕ひとりで、夜店へ出かけ、歸つてくると、コソ〳〵兩親がその話なのです。僕の眞實の兩親、笠井の家では、僕を、アメリカへ呼ばうとしてゐるのだといふことも知りました。大野の兩親は、泣いてゐました。悲しんでもゐました。しかし、そのうちに、僕の幸福のためにはといつて、父も母も、あきらめることになつたのです……」

達二は、さつきから眼にいつぱい涙をためてゐたが、とう〳〵、我慢がしきれなくなつたものか、ボロ〳〵と、膝の上へ、兩掌の上へ涙をおとした。

「先生、どう考へても、僕は厭です。アメリカへゆくなんて、たとへ、眞實の、ええ、僕を生んでくれた兩親が招んでくれるにしても、僕は大野の子です。どん

なに貧乏でもどんなに辛くとも、大野の兩親に、いま別れる氣はしません」

中戸先生は、默つて大きくうなづいた。

「僕は、朝、納豆を賣ります、夜店を出してるために、寢るのも遲くなります、それで、今日みたいに、居眠りをしました。まつたく恥しいことだと思つてゐます。どうぞ先生、僕の級長をやめさせ、野球選手も辭退させてください。そのかはり、僕が、さうして働きながら、學校へ通ふことだけは、無理だと仰言らないでください。學校の成績だけは、必ずおちないやうに、勉めますから、先生、この腕を、見てください。こ、これは、眠くなつたとき、眼をさますやうに、左手で力限り、抓つてきた、その跡なのです。ところが、今日は、僕――」

達二がまくりあげた、右の二の腕には、生々しくも爪のあとが、幾つも、幾つも、紫色に、あるひは、血ににぢんでついてゐるのだつた。

「笠井君、とにかく、君の心持は、よく判る、また、實に偉い。いまがいま、すぐかうしろとは、僕にもいへない。まあ、時機を待たう」

中戸先生は、胸のポケットから、ハンカチを出して、そつと、達二の涙を拭いてやつた。

わかれ道

達二は級長と野球選手とを、同時に辭すこととなつた。西郊小學校にとつては、大打撃だつた。殊に、六月下旬を期して、郡部の小學校野球大會が、年々おこなはれ、昨年は惜くも準決勝で敗れてゐるのだから、今年こそは、決勝戰まで漕ぎつけやうと、全校の生徒が、熱心に聲援してゐるのだつた。しかもその日は、間近に迫つてゐた。中戸先生も、その理由については、默つてゐたし、達二はもちろん、なんのいひわけもせずに、相變らず朝は納豆を賣り、夜は野菜車を引いて、

義母のお峰と二人、夜店を張るのだつた。

ある晩のこと――心持汗ばむ肌を、夜風に吹かれて、輕くなつた車を引いて歸る家路に、お峰はいかにも、いひにくさうに、

「ね、達ちやん、何時かは、いはう、いはうと思つてゐたがねえ――たうとうアメリカから、お前のお父つあんが、迎へに歸つてきなさるんだよ」

「あ、お母さん、そんなこととききたくないよ、僕に二人もお父つあん、ある筈はない。名前こそ二つあるけれど、それだつて、家のお父つあんは、きつと、いまに、大野達二にしてやるつていつたんだもの、それを、いまになつて、そんな……」

「さういつてくれるのは嬉しいけど、遠いアメリカから、歸つてきなさるお父つあんに、お前のこんな姿をお見せしたら、なんとお思ひだか――いまぢやア大變なお金持になつてゐなさるさうだし、弟の進三さんや妹の美代子さんもみんな、

立派に育つて、學校だつて、なに不自由なくやつてゆけるのに、お前ばつかりこの分ぢやア、來年中學へも行けつこないだらうし……人間一生の運が、決つちまふんだからね……」

お峰は、鼻をつまらせてゐた。

「お母さん、そんなことはありませんよ、中學へゆけるゆけないで、人間一生の運が決るなんて、そんなことは決してない。まして、僕今さら、笠井の家へ歸るなんて、思つても厭だ――」

「だけど、達ちやん、明後日だよ、笠井のお父さん、日本へ歸つてくるのは――」

達二は默りこんで、車をひいた。すぐ向ふに、貧しいわが家の灯影が、見えるのだつた。

（明日と、明後日とは、野球大會だな、選手として、出られないまでも、せめて決勝までゆくやうだつたら、應援に出かけたいな）

さう思つた。

「ね、お母さん、お父つあんの身體も大分快いだし、明後日の日曜だけは、野球大會見に行つてもいいね？」

と、お峰はびつくりしたらしく、

「まあ、お前、とんでもない、明後日は笠井のお父さんが歸つてくる日ぢやないか、野球大會どころか、達ちやん、笠井のお父さんは、その日にもお前を家からつれてつちまふに違ひないんだよ……ああ、なんてえことだか、でも、お前が、一生幸福になれることだし、いまとなつちやア、……」

お峰の聲はふるえてゐた。

噫！　その日は來た

達二は、朝から、兼吉に、監視されてゐた。

「ええ、野球どころかい、俺ア、今日まで、お前を叱つたこたアなかつた。な、だが、今日だけは無理をいはせてくれよ、な、いまに笠井のお父つあんがくる、そん時に、お前がゐなくつちやア、申しわけがねえ。それに、今日からお前は、向ふさまへつれてゆかれるんだよ、一刻でもいい、俺の側にゐてくれ、たのむからな！」

兼吉は、病後の身體ながら、髯もあたつて、こざつぱりした着物でおろ〳〵しながら、かういふのだつた。

「お父つあん、許してください、僕は、笠井の父に逢ふのが厭なんだ、僕のお父

つあんは、あなた一人だ、僕は一日も早く大野達二になりたい……」

店先近く、立派な自動車がピタリと止つた。

「大野さん、兼吉さんでしたな……」

肥満した身體に明るい服をつけた、赧ら顔の紳士が、ヌッと入つてきた。

「お久しう御座いました！」

兼吉は、オヅ〳〵と挨拶した。

「何から、申しあげてよいか、お詫も、重々いたさんければならんが——」

達二は、コッソリ裏口から逃げ出しかけたが、お峰に、抱きすくめられてしまつた。

「それ、あれが達ちやんの、眞實のお父つあんなんだよ」

「——いやだ、いやだ、僕は、二人もお父つあんを持ちたかアない」

達二は、口惜しさうに、涙をポロ〳〵流した。

「おお、達二か！」

笠井は、ふるえる手を伸して、

「お前は、二人もお父さんを持つのは厭だつてのかい？」

その眼は涙にぬれてゐた。

「——」

達二は、うなづいた。

「さうか、さうだつたのか——」

笠井は、双手をつくと、兼吉夫婦に詫びるごとくいつた。

「いや、大野さん、私の考へは間違つてゐました。今さら親だなどとは、名告れない。不始末を重ねてゐた上に、達二の、いま言つた、たつた一語が、私の過ちをば、ピシピシ責めてくれます！」

「しかし、笠井の旦那、この子の幸福でさア、一生の運が決るんでさア、私たち

夫婦は、もうキッパリとあきらめました」

笠井は、びつくりしたやうに、眼を見はつた。

が、これまで默つてゐた達二は、笠井の前に手をついて、

「僕の幸福のためにだつたら、どうか、大野達二としてください。大野の家に育つて、笠井達二といつてなければならないなんて、なによりの不幸です。どうか、どうか、さうしてください。お願ひです、お願ひです」

笠井は、絶望したらしく、うなづいた。

「よろしい——なにもかも、お前の望みどほりだ、生みの親とは云ひながら、十三年、かうして立派に育つてくれたお前に對して、私には親の資格なんてありやしない」

達二は、ワッと聲をあげて泣いた。

「笠井君！　笠井君ゐるかい？」

同級生が、慌ただしく店へとびこんできた。

「君、頼むよ。中戸先生からの命令なんだ。いま決勝戰で三對〇、南泊小學にリードされてるんだ。すぐきてくれ」

「え？」

達二は立ち上つた。

「何回だ？」

「六回なんだ」

「よーし……」

達二は、涙をふいて、奥へ驅けこんだ。笠井は、啞然としたが、兼吉から事情をきかされると、はじめて微笑んだ。

「行かせてください、私の自動車を使つてください——いや、いかがです、大野さん、私も見物したいが」

「どうぞ、達二の左利き投手ぶりを見てやつてください」

「さうですか、級長や、野球選手を止めてまで、納豆を賣つたり、夜店を出したり……」

「誠に申しわけのない――」

「いや、それでも、なほ二人の父を持ちたくないといふ、達二の希望、いや、よく判りました。みんな、あなた方の愛の力だ、愛の力には敵ひません、達二の思ひどほりにしてやりませう」

達二はユニフォホーム姿で飛び出してきた。

笠井投手最後の日

ある郊外電鐵經營のグラウンド、そのスタンドには、數萬の觀衆が、總立ちになつてゐた。

熱烈な拍手、歡呼の聲、奏樂のひびきかくて、優勝旗授與式は、いま正に迎へられやうとしてゐた

三對〇とリードしてゐた南泊小學校は、突如として、現はれた西郊小學校の主戰投手、左

利笠井のために、せつかく迎へたラツキイ・セブンもチャンスを失ひ、反つて西郊に、七回一點、八回二點、同點となつて最終回、笠井の三塁打に一點を加へられ、三對四で敗れたのだ。

場内の一隅、蒼空高く、そびえ立つた旗竿に、翻る大會旗、それへいまや優勝校、西郊小學の校旗はスル〳〵とひきあげられた。光榮ある校章よ！　その輝きよ！　笠井はいひしれぬ感激に打たれて、兼吉の手を握りしめた。

「大野さん、今日までは達二も笠井でしたが、明日からは大野と名告らせてください、この世にあの子の兩親として心から愛撫してくれる者は、あなた方御夫婦のみでせう」

「笠井さん、しかし、それでは――」

「いや、私はあきらめます、よろこんで、養子としてさしあげます。生みの親より育ての親です、生れて間もなく、別れたきりの達二が、かうして一校の責任を

肩に、堂々たる投手ぶり、最後の勝利をまざ〳〵と見せてくれました、それにつけても、私は恥ぢいります。あの肉體の強さ、あの魂の烈しさ、みんなあなた方のお蔭です」

笠井は、グラウンドの中央、いま正に優勝旗を受けつつある達二の姿に見入つた。中戸先生は、笠井に囁いた。

「笠井さん、投手ぶりよりも、達二君の、明晰な頭腦をお忘れくださいますな、學業は、優秀ですぞ！」

達二はこのとき西郊小學校全生徒のエールを受けてゐた。

「フレー、フレー、笠井！」

しかし、笠井投手と呼ばれる、最後の日なのであつた。

大陸の奇術師

掌に殘つたカード

舞臺では獅子(ライオン)のジュリアが、恐ろしい吼聲(ほえこえ)をたてると、獅子使ひの重吉が振る鞭の音は、フユッ、フユッと鳴り響いて、見物席は潮がどよめくやうな喝采(かっさい)である。テントの破れ目から吹込んでくる凍えるやうな風を防がうと、おぼつかない指尖に針を摘んで縫ひ合せてゐた姉弟子(あねでし)の花千代は、

「ねえ、ミチイ、結局ジュリアに人氣を掠はれてるぢやないか？」

と、自棄つぱちのやうに云つた。

「でも――」

ミチイと呼ばれた美千代は不服らしく、

「妾達の奇術だつて、相當目的にして來るお客さまがあるんぢやないかしら」

「ふふん！　そりやアね、ミチイはお師匠さんの跡目をねらつてる位ひだから、さうとでも思はなくちやア……ああ妾ア故郷へ歸りたくなつたよ」

花千代は華な舞臺衣裳の上に被つたはんてんを寒さうにかきあはせた。

「花ちやんは歸れる故郷つてものがあるんだから羨ましい」

美千代は力なく呟いて鏡臺(きやうだい)へむかつた。

ふたりは大下サーカス團に一座してゐる、ジャグラー八千代の姉妹弟子だつた。花千代は十八歳、美千代は十六歳。若しジャグラーの名跡(めいせき)を繼ぐとしたら、當然花千代の筈なのだが、舞臺の腕前の優れた美千代(みちよ)がジャグラーの名を繼ぐ事になつて居た。

「重吉さんみたいな仕事、男らしくて好いわねえ。お前さんがあの人を兄さんの樣に思つてるのも無理はないよ」

花千代はまたも搦むやうなものの云ひかただつたが、美千代は默つて白粉をとかしてゐた。

「だけどミチイ、要心しないといけないよ」

さも意味ありげにせせら笑つたので美千代は煩ささうに、

「何をさ？」

とはね返した。

「ミチイ、知らないのかえ？　獅子使ひの重吉さんは、とてもお師匠さん負なんだよ」

「あ、そのこと？」

美千代は冷くあつさり肯いたものの、その實は氣になるものか、小さな胸がドキ〳〵と鳴つた。重吉はガッシリした肩幅のひろい二十五六歳の美男。しかも歐米を十年も修業の爲に渡り歩いてゐた男だけあつて、日本人放れのした顏に、表

情が豊かだつた。

（いいのよ、いいのよ、そんなこと！）

美千代は、獨り心の中に云ひきかせながら、舞臺衣裳をつけはじめた。ちらり見やると、隣りに鏡を並べた花千代は、嬉しさうに手紙を讀んでゐた。その鏡臺の横には、兩親や弟妹達と一緒に撮つた寫眞が、黄ばんだままピンで留められてある。

（ああ、手紙――妾なんか、生れてから、手紙なんてもの貰つたおぼえが、ありやしない）

美千代は腹立たしくなり、やがて悲しくホロリと泣けて來るのだつた。ジャグラー八千代の手許にひきとられる迄は、九段の招魂社境内や、淺草觀音堂前の廣場で、「お父つあん！」とよぶ日本手品の老人が、泥水を金盥一杯ガブ〳〵飲ん

「ハイ、泥水と清水との噴きわけ、瀧の白糸まづこの通り……」

と、つぼめた唇からスーッと霧のやうに水をふく。これだけの藝が終ると、幼い美千代は笊を持つて、立見してゐる人達から一錢、二錢を乞食のやうに貰ひあるくのだつた。

本所、下谷、四谷あたりの暗い汚い木賃宿へ歸ると「お父つぁん」は、御飯を喰べなくとも濁酒を飲んだ。

「俺も昔は日本手品ぢやア、養老齋玄龍とよばれて寄席へ出りやア八町あらしとも云はれた男だ。が、時勢にやア勝てねえ、泥水と清水の噴きわけなんてありやアみんな嘘だ。おいら我慢して泥水をのんでゐるばかりよ、だからおめえ、夜になつたらせめて濁酒ぐれえのまなくちやア……」

ぶつ〳〵愚痴をこぼしながら、醉ふとそのままぶつ倒れてねてしまふ。この爺さんがポックリ死ぬと、やがて美千代はジャグラー八千代にひきとられたのだ。

どこで生れたか？　親は誰か？　そんなことはまるで判らない。

ヂリヂリと鈴が鳴つた。

「出演だわよ、ミチイ、なに、ぼや〳〵してんのさ……」

花千代は、はんてんをスルリとぬぎすて、樂屋からとび出してゆく。美千代も立上つた。最初に派手なジャグラー八千代の大奇術があつて、それから彩りに美千代と花千代とは、自分達の寫眞が刷りこんであるカードを觀客席へ指尖ではぢきとばすのだつた。近い處はともかく三十米位ひビューッと飛ばすには相當修業がいる。二人の花形が、にこやかな愛嬌を見せながら、見物席へくまなくカードをとばしてゐると、どこからともなく一枚のカードが逆に美千代めがけてビューッと飛んで來た。

「あッ！」

思はず身をかわした彼女、手練の早業、パッと指でとめた。しかも自分がはぢ

きとばすカードはもうなくなつてゐた。陽氣な、はやめの音樂につれて二人は後退りにさがつて、師匠八千代が再び大奇術にかかるのだ。美千代は掌に殘された、見物席から器用にはぢき返して來たカードをちらりと見やつた。

「あッ！」

思はず彼女はそのカードを誰かに氣づかれてはならぬと、しつかり握りしめたが、さて吉い事か？　惡い事か？　身體がガタ〳〵ふるえて來た。

「お前はみなし兒ではないぞ

今夜俺が必ず迎へにゆくぞ」

カードのおもてには、判りやすく、假名までふつて、かう書いてあるのだつた。

罠かしら？

終演後のサーカス天幕ほどうら淋しいものはない。華かな燈火が消えて、寒い冬の風にパタ〳〵と幟旗が鳴つてゐるばかり。つめたい月の光りが霜をおいたやうに光つて動物達が檻の中で唸つたり、吼えたりしてゐる。美千代は旅宿へ引揚げる前に、必ず獅子のジュリアの檻へいつて、肉を一片投げてやる癖があつたので、今夜も、例の不思議なカードを外套のかくしへ突込んだまま、動物小屋の方へ歩いて行つた。

「おつとミチイ、お待ちよ！」

花千代がよびとめた。

「なにさ？」

「ミチイはジュリアが好きなのかい？」

「ああ！」

「さうかい、それきいて安心したよ、重吉さんは、妾とこれから町を散歩する約

東なんだからね、ジュリアの餌をたのんだよ」

美千代はつきのめされたやうな氣持がした。獅子のジュリアも好きではあつたが、花千代にかう云はれると、日頃兒とも頼む重吉を奪はれたやうに感じられるのだつた。

「さ、行かうよ、重さん！」

「O・K！」

「ぢやア、あんたもミチイにたのんどくといいわ」

「おお！　ミチイ！　ジュリアの餌をたのむよ、僕は花ちやんと散歩だ！」

二人は腕を組んだまま踊るやうな歩調で行つてしまつた。（ひどいわ、花千代の奴！）美千代は下唇を嚙みしめながら、動物小屋へ近づくと、ジュリアはもう彼女の足音を知つてゐて、たてがみをユサ〳〵ふりながら前肢をふんばつて、ウオーッ、ウオーッと吼えたてた。肉の催促なのである。

いつも容れてある餌箱をあけて見ると、ジュリアが騒ぎたてるのも無理はない。いつも重吉がやる筈の分までそのまま殘つてゐる。

「お腹空いてるんだらう、ジュリア！」

肝腎な藝をするジュリアに餌もやらないで花千代と散歩に出かけてしまつた重吉が憎らしくなつた。美千代はいつか幼い頃空ききつたお腹に、御飯はおろか、大福餅ひとつ貰へず、お父つあん――と呼ぶ爺さんが飲む濁酒をお酌してゐた自分を思ひ出すのだつた。

ジュリアは、美千代が投げてやる肉片や骨つきの肉を、悉く喰べてしまふと、檻の隅つこへいつてゴロリと横になつた。

「隨分現金ね、ジュリアの奴！　ぢやア、左様なら！」

戻りかけた時、積みあげた枯れ草の蔭から、

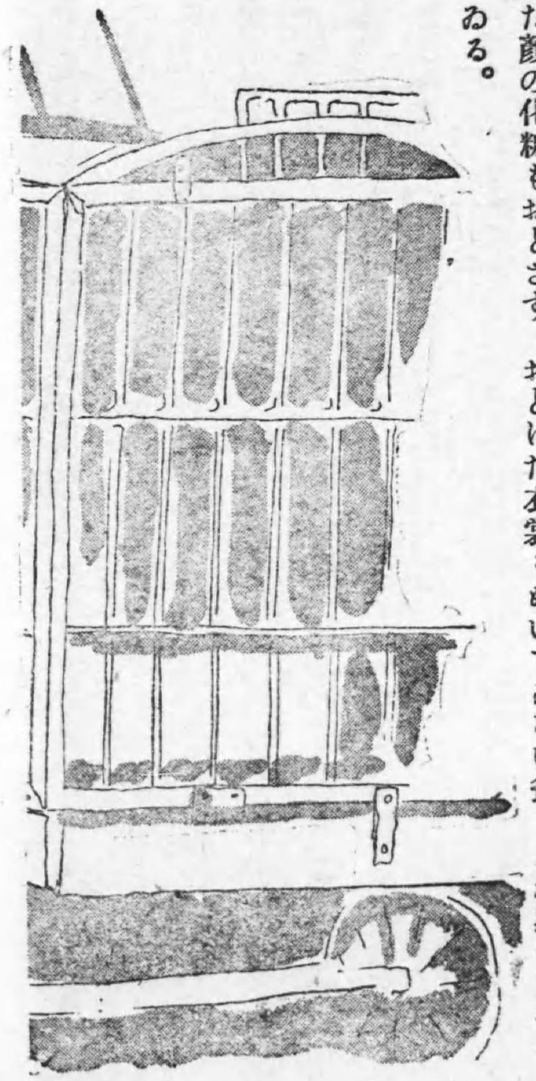
「ミチイ、ミチイ！」

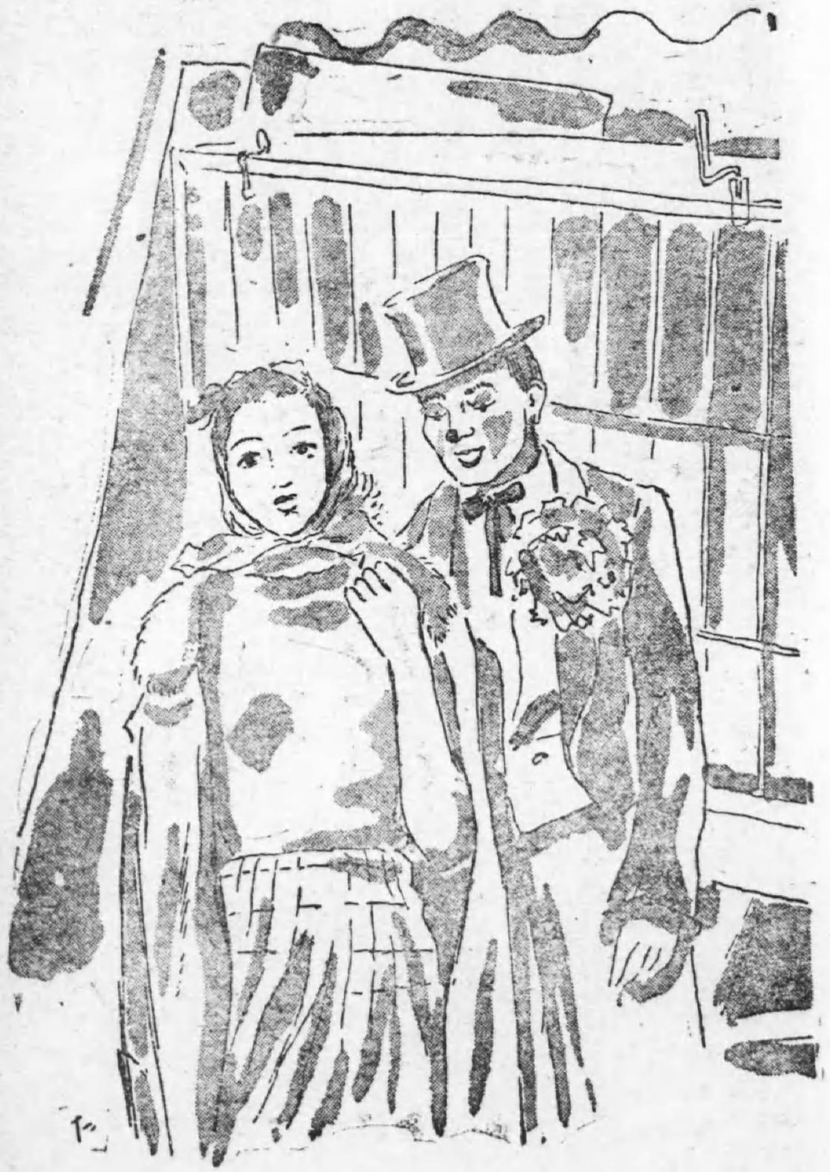
と呼びかける聲。道化師の三太爺さんらしい。

「だあれ？」

「うむ、三太だよ、バ――ッ！」

まだ顔の化粧もおとさず、おどけた衣裳もぬいでゐない爺さんが默つて手招きしてゐる。





「なあに？」
美千代が枯れ草の蔭へ入つてゆくと、
「なあに？――ぢやねえせ、お前さん先刻、カード投げの時、お客の方からもカードがとんで來たてえぢやねえか」
「――」
美千代は云つてよいものか、惡いものか默つてゐると、
「俺には正直に云ひな、え？　ミチイ、それが問題になつてゐるんだぜ」
「どうして？」
「師匠のジャグラー八千代嬢、お前さんをよそのサーカスから誘ひ出しにでも來たんぢやないかと思つてるらしい。損だよ、いまそんなことしちやア」
「違ふわよ」
「違ふ？」

「三太爺さん、默つててね、ほら（お前はみなし兒ではないぞ、今夜俺が必ず迎へにゆくぞ）――つてのよ、變なカードだわね」
「うーむ！」
道化師の三太爺さん、腕を組んだまま考へこんでしまつた。
「さて、この文句も氣にいらねえなあ、うつかり八千代師匠にこのカードを見せたら、おめえ責め折檻されるぞ。それにしても、こ、こいつは、第一、そんなカードが客席からとんでくるなんて、おお、こいつは誰かが仕掛けた罠だぜ、ミチイ」
「罠？」
「さうよ、おめえは何も知るめえが、あの花千代が重吉といやに仲よくなつてるだらう？」
「うん！」

美千代の返事には元氣がない。

「しかもジャグラーの名を花千代がねらつてゐるんだ。それにはおめえが邪魔になる、そこでミチイを惡い者にしようと仕掛けたのさ」

「だけど三太爺さん」

美千代の聲はふるえて眞劍だつた。

「このお前はみなし兒ぢやないぞ——つてのが！」

「わ、は、は、は、は、……そんなそんなおめえ、罠つてものなあ、だまかしてひつかけやうてえもんだ、甘え文句の一つも書いておくさ。俺もこの年齢になつて、舞臺でおどけちやアゐるがみなし兒よ、おめえもみなし兒よ、おや泣いてるのかえミチイ、泣くこたあねえ、泣くこたあねえ、さ、いつもの歌を唄つてやらあ！　おとなしく旅宿へ歸んなよ、一緒にゆかうせ」

三太爺さんは、美千代を抱くやうにしながら枯れ草をふんで唄ひ出した。

〈おどけ顔して白粉つけて
道化役者は悲しいよ
口ぢや云へない義理ゆえ身ゆえ
他人に笑はれ泣いてゐる

その時テント小屋の中から、

「ちよいと待つておくれ、二人とも——」

昂奮してるらしい金切聲が呼びとめた。

危機迫る白刃

とげ〳〵したジャグラー八千代の顔が蒼ざめてゐる。月光の所爲ではないやうだ。

「二人とも此方へ入つておくれ！」

道化師の三太も美千代も、テントの割れ目から這ひこんだ。と、内部は眞暗である。

「爺さん、脚光だけおつけよ、あとは無駄だからね」

「ねえ、師匠、どんな御用か知らないが、旅宿へ歸つてからぢやいけませんかい？　この娘も腹が減つてませうし、それにこの寒さだし……」

「お默り、三太！　妾や、終演後、みんなの歸つちまふのを待つてゐたんだよ。

今夜はこの娘にすこうし痛い眼見せてやらなくちやア。お前も手傳ふんだ、いゝか」

「へい！」

三太は仕樣ことなしに脚光のスキッチをいれた。が、先刻までのやうに明るい舞臺ではない。唯だ足許が明るいばかり。ガランとした觀客席がぶきみにくろずんで、僅にテントを洩れてくる月光が三人の八を照してゐる。

「三太！（魔の箱）を押出しておくれ」

「へい、だけど師匠、まさか夜中にお稽古でもないでせうね！」

「ふゝん、稽古どころかい、まさかの場合はこの娘をあの中へとぢこめちまふつもりさ」

「ええッ？」

「そして、白刃をブス〳〵突き刺してやるんだ」

「あの仕掛けなしで？」

「さうともさ、この娘が正直に云へばともかく、知らぬ存ぜぬなどゝ云ひ逃げやうものなら、ほんとに痛い眼見せてやるからね。三太、いまから云つとくけど、止めだて一切御無用だよ。さ、何を愚圖々々してんだい。はやく箱を出さないか」

三太は力ない歩調で舞臺の横手へ入つていつたが、ぢきにゴロ〳〵と床を軋ませながら黑い大きな（魔の箱）を押出して來た。

これはジャグラー奇術の大呼物で、箱の中へ少女をとぢこめ、四方八方から白刃をつきさし、見物にハラ〳〵させたのち、ピストル一發、箱の中へいれられた少女は見物席からとび出してくると云ふ放れ業——併し、いま八千代が仕掛なしと云ふのは、美千代をとぢこめ、箱からぬけ出させずに、白刃を四方八方から突き刺さうと云ふのだ。まさか殺すつもりもなからうが、全身痕だらけになること

はたしかだ。

「さ、美千代、そこへお坐り、お前は何だつてまた、いゝえ、いつの間に針金先生と知りあつちまつたんだい？」

「は、針金ですつて？」

美千代は恐ろしさに身をすくめながらもその名のをかしさに、つひ笑ひたくなつた。

「まあ、いけ圖々しい奴だこと、笑つてるよ、この娘は？」

八千代は口惜しさうに齒をギリ〳〵噛み合せて、

「さ、針金先生を何時から知つたんだい？　そして先刻お前が打合せたカードをお見せ！」

「破いちまひました」

「えッ？」

美千代は三太から前もつてきかされてゐたから、師匠の八千代によびとめられた瞬間、さてはと思つて、こな〻に破いてすてゝしまつたのだ。

「それぢやアお前、飽までも、知らないで通さうつてんだね」

「だつてお師匠さん、妾、まつたく針金先生なんて——」

「いゝよ、いゝよ、さ、三太、(魔の箱)の蓋をあけるんだ！」

「ま、師匠！　あつしやにやアよく判らねえが、あの針金先生がこのジャグラー一座をねらふのは昨日今日始つたことぢやありませんせ、ほら四五年前に——」

「えゝ、餘計なこと云ふんぢやないよ、さ、蓋をおあけつたら！」

「へい、聞けますがね、あの針金先生とこの娘が知りあつてゐて、カードで打合せる、そ、そんなこたあ……」

「三太！　妾の眼は節穴ぢやないんだよ。舞臺でちやんと見屆けてゐるんだ。見物席へカードを、これと花千代が投げてゐると、逆に向ふからとんで來た一枚の

カード、それをこの娘はたしかにうけとつた。そのカードが曲者さね、さお入り、美千代、痛くて痛くて我慢が出來なかつたら白狀するだらう！」

(魔の箱)の蓋が開くと、美千代を無理矢理内部へ押しこんでしまひ、重い蓋をガチャリとしめ、ピンと錠をおろしてしまつた。

「さ、三太、見ておいで、これから眞實の白刃責めだよ、いつもならもうあの娘は箱をぬけて、キャラメルでもしやぶつてゐようが、今夜は違ふよ、美千代！美千代！」

大聲によぶと、内部からは悲しげなすゝり泣き。

「お師匠さん、許して、お師匠さん、勘辨して……」

悲鳴をあげる聲がきかれる。

「それぢやアお前、針金先生を知つてたのかえ、いえ、知つてゐるんだらう？」

「知りません、知りません！」

「えゝ、強情な、よし、待つといでよ！　痛い眼見せてやるから」

ジャグラー八千代は、氷のやうに光つてゐる短劍を持ち出した。そして箱の左右から一本宛ズブリ、ズブリいまにもさしこもうとする。箱の中からは、美千代の泣聲が洩れてくるばかり。

「およしなせえ、師匠、可哀さうだ」

「かまはない、退いといで！」

途端に背後からその手をしつかり押へた者がある。

「あッ！　誰？」

「俺だ！」

低いが力强い聲。

しかしその聲は箱の中へきこえやう筈はなかつた。

「あッ！　針金先生！」

叫んだ道化師の三太はいきなりガーンと下あごをつきあげられ、

「ウーム」

とのけぞれば八千代は抵抗する間もなく、双手に手錠がビチンとはめられ、

「聲を出したら承知しねえぞ！」

と、猿ぐつわを嚙まされてしまつた。何人であらうか、この針金先生とは？

怪人！　せむし男

挾いまつくらな箱の中へ身をすくめたまゝ、唯だ泣くばかりだつた美千代は、白乃責めときかされたばかりで、箱の中へ白乃が突き刺されぬのを不思議に思つた。と、急に箱の外がシーンとしたらしい。

（あゝ、妾だけ箱の中へ取殘されたんぢやないかしら、もしさうだつたら――）

美千代は泣き聲をふりしぼつて箱を内側からドン〳〵叩いた。

「お師匠さん、勘辨して下さい。お師匠さん、許して下さい。此處を出して下さい。カードに書いてあつた文句を白狀しますから、お師匠さん！ 三太さあん！」

すると、俄に蓋がガチャリと開いて、脚光（フットライト）がサーッと流れこんで來た。

「あ、お師匠さん！」

さも嬉しげに叫んだ美千代は變りはてたる外のありさまに（あッ！）と氣を失はんばかり。身體をすくめたまゝ箱から出るにも出られない。

箱の外には道化師の三太が舞臺の床へぶつ仆れて手脚を縛られ、猿ぐつわを嚙まされてゐたし、その側には、師匠ジャグラー八千代が同じ運命だ。それのみか、見たこともないせむし男。ぞつとするやうな怪人せむし男が、箱の外からニタ〳〵笑ひながら覗きこんで、おいで〳〵と手招ぎをしてゐるではないか？

美千代はしばらく泣くことさへも忘れてゐたが、思ひ出したやうにシク〳〵と

泣きはじめた。

と、せむし男が毛むくぢやらの手をのばして美千代の背をさすりながら、

「泣くことはないよ、泣くことは。迎へに來たのだよ、俺が迎へに來たんぢやないか？」

と、皺がれた、ぶきみな聲でうめくやうに云ふ。

あッ、獅子が！

「泣くことはないよ、泣くことは——迎へに來たのだよ、俺が迎へに來たんぢやないか？」

皺がれた、ぶきみな聲で、呻くやうに云ふ怪人！ せむし男。美千代は恐ろしさの餘り顏を双手の中に埋め、シク〳〵泣いてゐる。ほつそりした肩がこきざみ

にふるへて。——

「判らないのか？　え？　花ちやん！」

美千代は、おやつと思つた。

「花千代さん！　お前はみなし兒ぢやアないんだぜ！　俺らが迎へに來たからにやア、直きお父さんに逢へるんだぜ！」

あ！　この不思議な男は、美千代を花千代と間違へてゐるのだ。

「違ひます！　違ひます！」

美千代は涙にぬれた顔をあげて叫んだ。

「えッ？」

「妾、花千代さんぢやありません！」

「ば、莫迦な——」

「いいえ、妾、妹分の美千代なんです。それにもちろん花千代さんの方はみなし

兒ぢやありません、ちやんと故郷があるんです」

「は、は、は、は、お前さん、何を莫迦な事を云つてゐるのか、可哀さうに、違ふよ、違ふよ」

「いいえ、違ふのはあなたです。花、花千代さんなら妾ぢやありませんたら！」

美千代は口惜しさに身體をふるはせて叫んだ。

まさか、こんな氣味の惡い、せむし男が迎へに來ようとは思はなかつた。今の今迄乙女らしい小さな胸に——『みなし兒ではないぞ、今夜俺が必ず迎へにゆくぞ』と書かれた不思議なカードが、包みきれない嬉しさと、希望とを與へてゐたのに、それだのに、愈々となつて見れば——こんな嫌らしい男が！

「ああ！　彼方へ行つてよ、彼方へ！　花ちやんなら街を散歩しててよ！」

美千代は耐りかねてワッと泣き出した。

「强情張るな、俺には判つてゐる。さ出ておいで、おとなしく。さもないと——」

せむし男は「魔の箱」の中へ、腕を伸して、美千代の肩を掴むと、無理矢理ひき出さうとした。

「あッ！　誰か來てえ！　助けてえ！」

救ひを呼ぶ美千代の聲。

「ええ、靜にしねえよ、判らねえ娘だなあ！」

せむし男は、美千代を箱からヅル〳〵引出すと大きな掌で、叫ぶ口をピッタリと押へた。その途端だつたか、ガサ〳〵と天幕の隙間が荒々しく搔き破られて、其處からウオーッ、ウオーッ！　と物凄い吼え聲。

「あッ！　ジュリヤだ！　ライオンよ」

「えッ？」

せむし男がギョッとしたらしく、ふり返ると、意外！　意外！　どうして檻からとび出したのだらう、獅子のジュリアが前肢をグッとふんばり、たてがみをふ

りみだして、その眼は爛々と燃え、いまにも飛びかからんばかりの姿勢を示して、ウオーッ！　ウオーッと吼えてゐるのであつた。

「あッ！」

せむし男はいきなり美千代の身體を突放すと、天井から舞臺につりさがつてゐる曲藝ブランコへひらりととびついた。

「ジュリア！　ジュリア！」

救はれた悅びと恐怖に戰く美千代の上づつた叫び聲、日頃餌をもらつてゐる所爲か、獅子使ひ重吉の次ぎに馴付いてゐる筈の彼女だつたが、今眼の前のジュリアは尾もふらず、前肢をふん張つたままウオーッ！　ウオーッと叫ひつづけてゐる。美千代は逃れる道なく、咄嗟に傍の「魔の箱」へとびこむと、急いで正面の扉をバタンと締めきつた。

（ひ、ひ、ひ、ひ……とんでもねえ奴が出て來たぞ！）曲藝ブランコの上で呟く

せむし男。

舞臺の床に手肢を縛られ、猿ぐつわを嚙まされ、俵のやうにころがされてゐたジヤグラー八千代と、道化師の三太とは、今や獅子ジュリアにとつて、何よりの獲物だつたに違ひない。しかも二人は救ひを呼ばうにも聲が出せないのだ。

炎の海

獅子ジュリアは、餌に戯むれる如く、八千代と三太の上をヒラリヒラリと跳躍して、ヴォーッ、ウォーッと吼えながらジリ〳〵と迫つてゆく。

（うーむ、彼奴等二人を殺しちまつちやアそれ迄だ、萬一の時に證人がなくなつちまふ！）せむし男はかう呟いた。（仕方がねえ、かうなつたら火防ぎだ！）

ブランコの上から彼は叫んだ。

「おーい、火をつけろッ！」

唯、思ひがけなく、せむし男一味の者が、天幕の外に待機してゐたらしく、邊りの枯草へ火をつけたから耐らない。折柄吹きすさぶ寒風に、メラ〳〵と燃え上るや、炎と煙とがドッと舞臺へ襲ひかかつた。

（ひ、ひ、ひ、ひ……）せむし男は、獅子ジュリアが、火を恐れてか、肝腎な餌を見捨てて、まつくらな見物席の土間へとびこむ姿を見屆けると、ブランコからパッと身輕におりたつて、素早く八千代と三太の繩を解いた。

「さ、逃げねえ！　早く、早く」

一方魔の箱の中に身をちぢめて顫へてゐた美千代は、ほんの三分か五分の間に、天幕（テント）や舞臺が炎（ほのほ）の波に襲はれてゐるなどとは想像もつかなかつたから、パチパチはじける異樣な物音を、なにかジュリアの所爲だとばかり思ひ込んでます〳〵一心に箱の扉を押へてゐる。

すると突然、無理矢理力まかせに開かれた扉。最早外は一面に眞赤な炎と黑い煙りとが渦を卷いてゐる。

「あゞ！　火事！」

「さ、早く出るんだ。命が危ないぞ！」

美千代は氣を失はんばかりに驚いた。思はずせむし男の手にすがつたが、既に舞臺いつぱいに這ひ廻る火焔と煙りの中を、これからどうして拔け出せやう。

「いいか、俺が負つてやる。しつかりと肩につかまつてろよ！」

とつさの間にせむし男は、八千代や三太の手肢を縛つた繩で、美千代を背にくくりつけ、またも曲藝ブランコへとび乘るや、大天幕の天井目指して、上へ、上へと、すばしこくあがつてゆくのだ。遠く近く半鐘の音。サイレンの唸り。消防自動車も驅けつけて來たらしい。

（チエッ、しまつた）とせむし男。天井まで辿りついたものの、下を見おろすと

いちめん燃えあがつて、いよ〳〵募る烈風に、今にも二人は吹きとばされさうである。

（ウーム、弱つたなあ！）その瞬間、眼にとまつたのは一條の太い針金だ。『針金渡り』の曲藝に用ひるためいつも舞舞の眞上から、正面見物席の一番高い處へピインと張りつめてある。それだけがまだ燃えきれてゐない。せむし男は針金を摑むとグイ〳〵引いて見た。ピイン、ピインと手耐へは確かだ。

（よしッ！　これなら大丈夫だぞ！）

美千代を背に負ふたまま、針金の上にスッと立上つたせむし男。なんと素晴らしい藝であらう。あッと思ふまに、スッ、スッ、スッと針金の上を渡つてゆく。これこそ針金先生と呼ばれる正體であらうか。せむし男は見物席の柱まで渡りつくと、天幕を破つて、圓形の屋根へ這ひ出した。

「あッ、あんな處に人がゐるぞ！」

「サーカスの奴が逃げおくれてゐるぞ！」
消防夫達が逸早く見つけて騒ぎ出した。
「それ、救助梯子だ！」
「いま救けてやるぞ！」
聲々に喚くのを、せむし男、ニヤリと笑つて、
「心配するな、こつちでおりてゆかあ！」
二米ばかりの下に電信線が幾條も通つてゐる。それをめざしてヒラリとびおりた。
「あッ！　危ねえ！」
ハラ〳〵しながら見あげてゐる消防夫達を尻目にかけたせむし男は、電信線の上を、スッ、スッ、スッと走るが如く渡りはじめた。
「おい、花ちやん、安心しな、もう命に別狀はねえぜ、二人とも助かつたんだ」

だが美千代はせむし男の背にかぢりついたまま、强情に首をふつた。
「妾、美千代だつたら。花千代さんぢやないつたら」
あはたゞしい半鐘の音が尙も續いてゐる。

豪華なホテルの一室

この港街では隨一と云はれてゐるキウシウ・ホテルの三階。豪華な部屋のベットに美千代は昏々と眠つてゐた。その枕頭には例のせむし男が大きな肘掛椅子へ身體を埋めて、これも疲れきつたらしく眠つてゐた。併し、美千代が輕く寢返りをうつ度に彼はパッと眼を開けて彼女の樣子をうかゞふ。それほど寸分の油斷も見せてはゐない。
「あらッ！」